私と世界が始まった日

eifos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と世界が始まった日

【Ｎコード】
Ｎ８２８０Ｏ

【作者名】
ｅｉｆｏｓ

【あらすじ】
あなたの余命は１ヶ月です。
原因不明の病気で入院して半年、あと１ヶ月で死ぬと宣告された風見疾花はその日生きる意味を見出だせなくなっていた。
そんなある日の夜、病室の窓から外を眺めていると中庭に季節外れの桜が咲いていた。最後の思い出にと見に行くと突然足元が光ったと思ったら、気がつくと異世界に召喚されておりしかも病気が治っていてその上世界を救う勇者様！？
普通の少女による普通じゃない世界創造劇が今始まる！！

プロローグ／はじまりはいつも突然に（前書き）

はじめまして、見てくれて有り難うございます！　読んでいただいたらもっと有り難うございます！！
処女作なんで変な言い回しや誤字・脱字などがありましたらビシバシ指摘していただいて構いません！むしろお願いします！

プロローグ／はじまりはいつも突然に

〜0〜

その少女は言った。シアワセでなくとも普通に暮らしたかった、と。ある少女は言った。世界を救うため自分を殺して欲しい、と。

病に侵され、ただ死を待つことしか出来ない少女と破滅を待つことしか出来ないとある世界の創造主が己の運命に抗うとき、凍り付いた二つの時間が動き出す。少女は生きるため、創造主は作った世界とその少女を生かすために。そして壊れかけの世界に響き渡る安らかな音色がもたらすのは終焉かはたまた再生か、それは誰にも判らない・・・・

〜?〜

世界とはそこに生きる人間に対して常に理不尽だと思う。一部の人だけに幸福を与え、残りはふつう、もしくは不幸を与える。そして私、風見疾花（かざみはやか）は不幸を与えられたうちの一人だった。幼いころから体が弱くちょっとした風邪でもすぐに治らず下手をすると1週間近く寝込んでしまうこともあった。そんな訳で小学校にはロクに行けず、中学校に入学し、学年が進んでもそれは変わらず・・・・・いや、むしろひどくなった。三年生になった直後原因不明の病気が発症し急きょ入院、それから半年近く学校には行っていない。まぁ勉強に関しては毎日家庭教師のような人が来てくれ気休め程度にはやっている。ここまで長期入院したのは初めてだがそんなにネガティブに考えてなかった。だって入院するのは慣れているし、そんな深刻な病気にかかっている自覚もなかったから。原因が分からなくっても体が元気なら大丈夫だ、そう思っていた。でも今は違う、ついこの間のことだった。気晴らしに院内を散歩していたらある部屋

の中からよく知った三人の声が聞こえてきた。話しているのは両親と私の主治医だった。話の内容は断片的にしか聞こえなかったけど一番重要な部分だけはハッキリと聞こえてしまった。

「・・・・言いに・・・・ですが、疾花さ・・・の余命は・・・・・くて三ヶ月が・・・んどかと・・・」

「・・んな！あの子はまだ・・・・・なんですよ！」

「これで・・・・・がく見積もった・・・です、もしかし・・・・・そこまで長くないかもし・・・・早くて一ヶ月、かと・・・・・。」

・・・・・なんだ、それ・・・・体の壊れ具合は自分が一番理解していたハズなのに、それなのにこんなにも早く限界が来るなんて・・・・・・・・。

〜?〜

それを聞いてから生きる希望を無くし生きている実感がないまま何週間たった。そんなある日の夜、いつもはすんなり寝られるのに何故か目が冴えてしまい、眠れないまま午前2時を過ぎてしまった。今夜はやけに月明かりが明るく、部屋の電気をつけなくても本が読めるくらいだった。とはいえ母さんが持ってきてくれた本は全部読んでしまい、やることがなく、なんとなく外を眺めていたると中庭に不思議なものを見つけた。————桜だ。今は9月の下旬、確か春以外に咲く桜があるらしいが、あそこの桜は入院した4月にはしっかり咲いていたハズだ。今咲いているのはおかしい。そんな不思議な桜に私は心を引かれた。（ちょっとだけ、行ってみようかな？）早速ベッドから抜け出し、ハンガーにかかっていた薄手のカーディガンを入院着の上から羽織り、静かに病室から出て一階にある非常口を目指した。

〜?〜

非常口を示す電灯の明かりを頼りに少しづつ歩みを進めていた私は病室を抜け出したことを凄まじく後悔していた。まるで幽霊が出てきてもおかしくない雰囲気をかもし出している足元だけ明るい廊下、飲み込まれそうな錯覚に陥りそうになる階段。因みに自慢じゃないが私はまったくこのテのものに耐性がない。いくら長期間病院にいるからといってオバケが怖くない理由にはならない。・・・・・

まぁでも私もあと少しでオバケの仲間入り、か・・・・。
　とはいえ本当に怖いのは巡回の看護師だと知っている。昔，こんな風に夜出歩いていて看護師に見つかりこっぴどく叱られたからだ。
　なんとか無事に一階まで降り、カギがかかっているかもしれないが一応玄関へ行ってみる。幸い看護師達は他の階段の巡回に行っているようでロビー前のナースセンターは明かりが　ついていただけだった。玄関に着いたが案の定自動ドアはカギがかかっていたため病院の裏手にある非常口へ　、そこから外へでると9月だというのに肌寒く、もっと着てくるんだったとちょっぴり後悔。少し小走り気味にあの不思議な桜のところへ向かう、月明かりが道を照らしてくれたので迷うことなくたどり着けたが息切れがヒドイ。たった２００ｍくらい、しかも小走りだったのに・・・・体力落ちたな。
　それでもなんとか桜の下へたどり着けた。桜は満開で足元には風で落ちただろう花びらが桜色の絨毯を作っていた。そして見上げると桜の木が月明かりを受け、とても幻想的な風景が出来上がっていた。
　と、そこであることに気がついた。足元が不自然に光っている。
（な、何これ！？月明かりじゃない）
そんなことを考えていたら突然頭の中に不思議な声が聴こえてきた。
『貴女ね、私の導きに答えてくれたのは。』
「誰？誰なの！？」『私は世界の意志“世界樹（イグドラシル）”の管理・統括プログラム。お願い、助けて！！』
「助けてって、あなたは何処に居るの！？」
『詳しい話は後、急いで“こっち”へ来て！』
「ち、ちょっと！！」
不思議な声はそれだけ言うと聞こえなくなってしまった。かわりに足元の光が強くなり何も見えないほどになり、それと同時に私の意識もそこで途切れてしまった。

プロローグ／はじまりはいつも突然に（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました！
まだまだ未熟なわたしですが、今後も読者の皆様とお付き合いできれば幸いです。
それではまたつぎのお話で・・・・・。

魔術解説

・ライト
ほとんどの初級魔術書に書かれているちょー初級魔術。魔導力子を手のひらの集め、反応させ光源として使う。異世界の人間だったら誰でも使える。
初登場　第３章

・ブレードリアクター
五大属性系統上級魔術書の中でも光輝系物質属性追加系魔術と呼ばれるマニアックな魔術。対象となったものに五大属性のうちの一つ、光輝属性を追加し対象の強度を増加させる。本当の名前は「ライトニングリアクター」だったがほとんどの使い手が剣刀類に対して使用していたため「ブレード」が付くようになった。
初登場　第３章

・ライトニングエクスプロージョン
五大属性系統最上級魔術書の中でも光輝系最高位魔術と称される魔術。手の中に集めた魔導力子を一気に圧縮し、大気中に放つ。放たれた魔導力塊は大気に触れた瞬間に表面が化学反応を起こし触れた物質を消滅させ、中心核が大気に触れると大爆発を起こす。元来勇者が使っていたとも言われている。
初登場　第３章

・フレアアロー
五大属性系統初級魔術書に記されている単体攻撃魔術。魔術師がボルト系魔術の次に覚える初歩的なものでちょっと練習すればだれでも習得することができる。

初登場　第５章

・フレアアロー・バースト

五大属性系統上級魔術書に記されている高位炎熱系魔術で初級魔術書に記されている「フレアアロー」の強化版。単体攻撃系の中ではかなり強力。

初登場　第４章

・探索（サーチ）

中級無属性魔術の一つで触れたものの記憶・残留思念を読み取る魔術。ただし生物に対しては効果が発現しない。古い記憶を探ろうとすればするほど熟練した技術が求められる。

初登場　第５章

キャラクター紹介

名前　風見疾花（かざみ はやか）
性別　女
年齢　１４→１５
一人称　私
能力　直視の眼・空間接続（マスタークラネクション）
設定　この物語の主人公。幼い頃から病弱でつい最近余命一ヶ月と宣告された薄幸の少女。ある夜、桜に導かれ異世界に救世主として（半ば強引に）召喚されてしまう。歳の割には大人びた顔をしている。
初登場　プロローグ

名前　世界樹管理・統括プログラム『イリス』（イグドラシル）
性別　女（？）
年齢　不明
一人称　アタシ
能力　物質創造・物質変換・物質破壊（クリエイション・アルティネイション・ディストラクション）
設定　とある異世界の創造主。自分の作ったプログラムのせいで壊れていく世界を目の当たりにし、自分を殺させるために疾花を喚ぶ。
初登場　プロローグ

名前　クロード・Ｃ・ラインフォート
性別　男
年齢　１９
一人称　僕

能力　魔術
設定　聖王国ハウリ所属の騎士。人外退治の途中に疾花を保護し、その後決戦まで行動を共にする。騎士では珍しく魔術が使える。親が東の大陸出身のためハウリでは珍しい金髪をしている。
初登場　第１章

名前　エステル・ブライト
性別　女
年齢　１８
一人称　私
能力　魔術
設定　クロードの幼馴染にして守護者（ガーディアン）の称号をもつ。綺麗な顔と長い赤髪で騎士団内では美人と有名だが、戦闘時は前に出て男顔負けの能力を発揮する。
初登場　第１章

名前　クローディア・Ｓ・ハーディスト
性別　女
年齢　１９
一人称　私（わたくし）
能力　魔術（特に風系統）
設定　聖王国ハウリの第一王女。まだ１９歳と若いが類稀な魔術の才能とカリスマ性で国民をまとめている。クロードの幼馴染でもある。愛称はクローゼ。
初登場　第２章

名前　ハンニバル・カートマン

性別　男
年齢　４８
一人称　俺
能力　なし
設定　聖殿騎士団（テンプルナイツ）の団長。クロードの上司でエステルの保護者。若いころから王宮に仕えているためクローディアとも面識がある。
初登場　第２章

名前　ヴァルナ・Ｓ・ラインフォート
性別　女
年齢　２３
一人称　私
能力　類稀なる暗器術
設定　色持ちの代行者（ドミニオン）の一人。綺麗な外見とは裏腹にドレスの中には常時２０～２５の剣刀類が入っていて最大では１００近く入っているらしいがどこに収納されているかは本人以外誰も知らない・・・・・。ちなみにクロードの姉。
初登場　第３章

名前　ユーリ・ナイトハル
性別　男
年齢　２１
一人称　俺
能力　なし
設定　西の大陸出身の旅人。男なのに長髪で女性と間違われることもしばしば。世界でも珍しい刀の使い手で本人曰く「俺の腕なら魔銀だって切ることができる」らしい。
初登場　第５章

名前　エリ・ナカミネ
性別　女
年齢　１５
一人称　アタシ
能力　動物と会話できる
設定　ユーリと行動をともにする少女。オレンジ髪のポニーテールと頭のゴーグルがトレードマーク。年齢には似つかわしくないハンドガンを使い、その腕は大人にも負けない。
初登場　第５章

キャラクター紹介（後書き）

次はキーワード紹介です。
それではまた

キーワード紹介

世界樹（イグドラシル）　異世界を統べるために神が作ったマテリアルのひとつ。現在はすべてのプログラムが集約されており実質神として機能しているが、バグが発生し世界を破壊しようとしている。

聖王国ハウリ　異世界にある宗教国家の一つ。異世界の国の中で唯一軍を持たない。国の北には神山と称されるハウリの峰があり、そこの奥には王宮が管理する≪聖殿カナン≫があるが、現在はある理由があり立ち入ることができない。疾花たちの旅の拠点になる。

聖殿騎士団（テンプルナイツ）　ハウリの持つ唯一の防衛戦力。本来はその名の通り聖殿カナンを守るための騎士団だったが現在聖殿に立ち寄れないため町の治安を守っている。

七輝石（セブチウム）　異世界に伝わる力を宿す石のこと。金剛石（ダイアモンド）、深紅石（ガーネット）、蒼穹石（サファイア）、翡翠石（エメラルド）、紫紺石（アメジスト）、漆黒石（オキニス）、琥珀石（タイガーアイ）の七種類。出土数は少ない。

代行者（ドミニオン）　王宮が抱える7人の騎士。それぞれに七輝石の名が与えられており、世界屈指の実力者でもある。

創世の魔導書『外側の神（デウス・エクス・マキナ）』　疾花専用の魔導書。はじめは白紙だがここに記録された情報はすべて扱えるようになる最強ともいえ

る魔導書。もうひとつの能力として物質再生能力を持っている。

王都マズルハ　　聖王国ハウリの首都。都市の北側には首府城がある。

魔導力子　　大気中に存在する不思議な粒子。これを集め起こす現象のことを魔術とよぶ。魔導力子が原因でおこる現象はすべて科学で証明できる。証明出来ないものは魔法といわれる。

魔導皮膜（マジックコーティング）　　服や鎧などの表面に魔導力性の膜のこと。性能はピンからキリまであるがこれを施されたものは弱いものでも９ｍｍ程度の弾丸を弾くことができるようになる。

魔導繊維　　魔導皮膜（マジックコーティング）とは違い服を構成している繊維自体に術式を織りこんだ特殊な繊維。すべてオーダーメイドのためとても高価だがそれに見合った性能を発揮する。疾花の服もこれで作られている。

神君廟　　代々のハウリ国王の眠る墓でありハウリ王室の宝物庫。王家の人間以外の者が立ち入ることが出来ないよう魔導性のプロテクトがかかっている。

時の羅針盤　　王家の所有する宝具。伝説によるとその名の通りものの時間を巻き戻す力を持っているらしい。

自律機動兵器　海底遺跡で発見された旧文明の遺産。今の技術では解明できないものでその性能はとても高い。小さいものから大型のものまであるがほとんどは動いていない。

魔導兵　神君廟の中に配備されている魔人形（ゴーレム）。装甲は魔銀でできており、普通の剣や槍で攻撃しても傷ひとつつかない強力な防衛用魔人形（ゴーレム）。

魔人形（ゴーレム）　その名の通り人形に魔導力を流し込み、動くようにしたもの。一般用から軍用のものまで多種多様。

魔銀　アールディオン帝国で見つかった鉱物。精製のやり方次第では鋼鉄より堅く、軽くできるという理想の素材。

第七真音律　疾花が買った魔術書『血まみれの聖典（ブラッディグリモワール）』に載っていた特殊な魔術。ほかの魔術と違い、独特のコードと詠唱で紡がれるどこか歌のような魔術。陰属性を持つため、触れたものすべてを侵食していくが対象も陰属性の場合は強力な負位置魔導力を宿すことができる。

飛空艇　魔術と古代技術を複合した空を飛ぶ船。民間用のものから軍用の戦艦まで多数ある。

インフェリアソード　『外側の神（デウス・エクス・マキナ）』に記録されている疾花が使う剣。形状を自由に変えることができる。

ボルト系魔術　魔術師になるために最初にヒーリングと並行して覚える基本魔術の総称。ファイアボルト、ライトニングボルト、アイスボルトの三種。基本的な魔術故使い手の技量によっては上級魔術に匹敵するものにもなりうる。

第1章／勇者降臨？（前書き）

どうも！長らくお待たせしました！
本当だったらもうちょっと早く投稿する予定でしたがいろいろと誤算があって遅れてしまいました。
ともかく『私と世界が始まった日～壊れかけの世界編～』スタートです！！

第1章／勇者降臨？

〜　？　〜

・浮遊大陸アルビレオ中央部世界樹（イグドラシル）上層庭園

「ん、・・・んぅ・・・あれ？ここは・・・どこ？」
私、風見疾花（かざみはやか）は桜の木の下で光に包まれて意識を失った。改めて周りを見回すときれいな見たことのない花、マンガや映画などで見たことのある神殿などで使われていそうな柱と白い壁。少なくとも入院していた病院にはこんな施設はなかった。というかここはほんとに日本？
「やっと目が覚めた様ね？」
「え？」
声のするほうを見ると見知らぬ女の子が立っていた。腰まで伸びた黒髪とどこかの学校の制服。どういう訳か解らないが彼女からは気配が感じられなかった。
「いつまで座っているつもり？いい加減立ったら。」
「あ、ああ、うん。ところであなたは誰？」
「忘れたの、世界樹（イグドラシル）よ。」
「え！あなたが！？」
「正確には貴女が話しやすいような姿を映し出しているだけだけどね。」
「そうなんだ・・・・って、なんで私は呼ばれたの？」
一番の疑問だ。何のとりえもなくその上病弱な薄幸（自分で言うのもなんだが）少女の私が誰かのため、しかも異世界の神様を助けるなんて・・・・・・・
「そうね・・・結構一方的だったからどんな人が来るかわからなか

ったけど・・・・・平気かしら、この子で・・・・・・・？」
「ちょぉとおおぉぉぉ！！！」
「冗談よ、貴女でよかった。呼び出した理由は簡単、この世界を救ってほしいの。」
クスクス笑いながら異世界の神様はトンデモナイことをさらっと言ってくれた。だから困るって・・・ひ弱なただの女の子に世界を救えって・・・・・・。
「大丈夫、そんなに心配しないで。」
「それで何をすればいいの？魔王を倒す？それとも世界をまとめる？」
「ううん、違う。もっと簡単・・・・・・私を殺してほしいの。」
「は・・・・？」
「正確には世界樹（イグドラシル）システムを破壊してほしいの、そうすればこの世界は救われるわ。」
「ちょ、ちょっと待ってよ！もし世界樹（イグドラシル）システムってやつを壊したらあなたはどうなるの・・・・・？」
「・・・・・・・・・・・・・・・消えるわ。」
待て、ちょっと待て。私は見ず知らずの人間（？）を殺すために異世界に召喚されたのか？そして彼女は自分を殺させるために自分を呼んだ？なんで、なんでなの？
「うーん、私だけ願いをかなえてもらうのはなんだしなー、・・・・・そうだ！あなたの願いをかなえてあげるよ！何がいい？」
「い、いやいきなり言われても・・・・・」
それにあなたの願いをかなえるって言ってないし。
「じゃあ貴女の体質を変えてあげる。・・・・・ほら！」
そう言って彼女が両手を広げると光が生まれ、私の中に吸い込まれていった。そしたら胸の奥にあった苦しかった元（？）のようなものが無くなりとても爽快な気分だった。何年振りだろ？
「どお、よくなったでしょ？ついでに身体能力も大幅に高めといたから。」

「あ、ありがとう」
「そろそろ旅立ちの時間ね、これを」
渡されたのは古びたナイフだった。
「ねぇ、まだ聞きたいことが・・・・」
「ほら、行きなさい。すぐに私の意識も目覚めるから。」
「まって！！」
そういった時にはすでに私の体は光の渦に飲み込まれており、自分の声すら聞こえなくなっていた。そして完全に視界が光に覆われていった。

～　？　～

・中央大陸メルティッド南部聖王国ハウリ領ラーダ平原西の遺跡内部ほこら周辺

光の渦に飲み込まれたと思ったら、視界が戻った。が、一瞬だけ浮遊感に包まれたその直後に周りの状況を把握した。
「なんで浮かんでるの！？」
そんな叫びが虚しく響いた時に既に私は地面に頭を強く打ち付けて声にならない声を上げながらのたうち回っていた。
――――数分後・・・・・
「どこのバカだ！体を強くしておいた何て言ったヤツは！！」
「失礼ね、ちゃんと強くしておいたわよ。普通だったら今ので死んでるわよ？」
「あなた、さっき別れたばっかりじゃなかったけ？」
ジト目で見た先には心からの叫びに応えてくれたかのように自称世界樹（ドラシル）管理・統括プログラムの女の子が立っていた。
「ええ、確かに別れたわ。じゃあ簡単に説明するね。ここにいる私は貴女の遺伝子（イグ）の一部を形成してる私のプログラムから発現してい

るものよ。ほら、さっき貴女の体を作り替えたじゃない。そのときに本体が道先案内人として私のことを作ったんじゃないかな？」
「そうなんだ。じゃあこれからどうすればいいの？」
「そうね、まずこの場所を離れましょ。人外が来るわよ。」
「人外？」
そのときだった。突然後ろの茂み２ｍはあるだろう人の体に狼の頭を強引にくっつけたような毛むくじゃらの不気味な生物が飛び出してきた！
「な、何よこれ！」
「人と似て非なるもの、人外よ。逃げましょ、今の貴女じゃ倒せないわ。」
なんていっているうちにあっさり取り囲まれてしまった。背後には古びた壁、逃げ道は狼人間の後ろ。・・・・ああ、万事休す・・・そう諦めかけたとき、突風のようなスピードで何かが突っ込んできた次の瞬間、目の前の狼人間がぶっ飛ぶ、それが地面に落ちたときには首がおかしな方向に曲がり絶命していた。残りのやつらは危険を感じてか突っ込んできた何かから距離をとりはじめた。
「そこのあなた、怪我はない？」
「はい、だ、大丈夫です・・・・」
突っ込んできたのはなんと人間、しかも女の子！？
「すぐに終わらせるからちょっとまってて。」
それだけ言って、その黒髪の女の子はあの狼人間の方へ駆け出す。襲いかかる長い爪を難なく避け、狼人間の懐に潜り込み鳩尾に一撃。怯んで前屈みになったところに容赦なく顔面に膝蹴りを食らわせ脊椎を破壊し、まず一匹を仕留める。もう一匹はというと恐れをなしたかすでに逃げ出していた。
「歯ごたえのない連中・・・・・クロードは何してんのかしら。」
「あの、助けてくれてありがとうございました。」
「ううん、どういたしまして。私はエステル・ブライト、あなたは？」

「風見疾花です。」
「カザミハヤカ？変わった名前ね。ああ、ごめんなさい。失礼だったね。ところでハヤカちゃんはなんでここにいるの？今ここは立ち入り禁止のハズよ？」
「ええっとそれは・・・・・・・」（ねえイグドラシル、今までのこと話してもいいかな？）
（そうね、いいんじゃない。貴女の冒険には協力者がいた方がいいから）
というわけでエステルさんに今まであったことを包み隠さずに全部話した。
「つまりあなたのいうことを整理すると・・・・・あなたは世界樹（イグドラシル）に呼ばれてこの世界の救世主として今ここにいる、ってことだよね？」
「はいそうです。」
「証拠は？」
「え！しょ、証拠ですか！？」
そんなものあるわけない。だって彼女から貰ったものはどこにでもあるような一本の古びたナイフだけだ。この服だってただ変な服だと思われるだけだろう。つまり何の証拠もない今、私はただのイタイ人のにしか見えないだろう。そのとき私の後ろからイグドラシルが出てきた。
「初めまして、私は世界樹（イグドラシル）の化身で今はこの子に憑依しているわ。」
「わ！ななな、何それ！？ゆゆゆゆ、幽霊！？」
「失礼ね、私はあなたにわかるように周りの光を反射率を変えて目で見えるように調整しているだけよ。まあ、この子の守護精霊だと思って。」
「そっか、これは一回王都に戻らないといけないかも・・・・・・とりあえず遺跡を出ようか。人を待たせてるんだ。」
「はい、わかりました。」
こうして私の世界を救う旅がはじまった！

～　？　～

・中央大陸メルティッド南部聖王国ハウリ領ラーダ平原西の遺跡入口

「エステル、何してたの？」
遺跡から出てきた私たちに声をかけてきた青年。エステルさんが待たせていた人とはこの人だろう。サラサラの金髪は肩辺りで切り揃え、テレビに出ている様なアイドルに負けないくらいのイケメン顔を引き立てている。けっこー好みかも！
「ごめんね、要求所者がいたからさ。」
「後ろの娘かい？」
「うん、それでさちょっと王都に戻らないといけないといけないかもしれないんだけど。」
「なんでだい？忘れ物でもした？」
「違う！実は・・・・・」
少し離れた場所からエステルさんと金髪のお兄さんが話しているのを眺めていると、イグドラシルが話しかけてきた。
（ねぇ、生年月日教えて。）
（え？なんで？）
（貴女専用の武器を作ってるの。それに入力するから。）
（そうなんだ、あんまり過激なヤツは作らないでね。）
（うふふ、作らないわよ。）
「ハヤカちゃん、いくよー！」
「はーい、今行きます！」
私たち三人は王都への道を歩き出した。金髪のお兄さんはクロードというらしい。エステルさんとは幼馴染みで今は騎士団に入り、街の治安を守っているらしい。
「そういえばハヤカちゃん、歳はいくつ？」

「１４です。エステルさんはいくつですか？」
「私？私は１８だよ、ちなみにクロード　は１９。」
「ん、呼んだ？」
「ううん、ハヤカちゃんに歳聞いたついでにアンタの歳を教えたのよ。」
「そっか、それでハヤカはいくつなんだ？」
「１４です。」
「若いね、それで世界を救えだなんて・・・・」
「何暗いこと言ってんの？勇者よ、勇者！何か問題あるの！？」
「それはそれで大変なことだよ！もっとちゃんと考えないと！」
てなカンジでエステルさんとクロードさんが口論をはじめてしまい、私が入り込む隙間が無くなってしまった。そんなとき、いきなり虚空に一冊の本が現れ私の手の中に収まった。その本は緋色の表紙に七色の宝石が散りばめてあり、縁には金属で凝った装飾がされていた。
「何これ？」
「これは貴女の武器であってこの世界を再生させる為の鍵でもある創世の魔導書『外側の神（デウス・エクス・マキナ）』よ。」
本からファンタジー風の服を着たイグドラシルが出てきた。ただし身長が３０ｃｍくらいのが・・・・・
「ちっちゃ！なんでそんな格好なの！」
「こっちの方が妖精っぽくっていいじゃない。」
「精霊っていってなかった！？」
「そうかしら？ま、それはそれとして名前は長いから・・・・・・
そうね、イリスって呼んでちょうだい。」
「なんでイリスなの？」
「人間だった頃の名前よ。」
エステルさんたちは口論が終わったようで二人ともそっぽを向きながら黙々と歩いていた。それから十数分ほど歩いたころ、目の前に大きな門が見えてきた。

「おお、着いた着いた。ハヤカ、あそこが聖王国ハウリの王都マズルハだよ。」
「あそこがマズルハ・・・・・」
「首府城へ行くわよ、クロードこのことの報告、よろしくね。」
「ええ！僕が！」
「アンタのほうが言いやすいでしょ？はい、決まり」
「全く強引なんだから・・・・・・」
「首府城って・・・・なに？」
私の質問は虚しく空へ消えていった・・・・・・・・・

第1章／勇者降臨？（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました！
今回はバトルが一瞬で終わってしまいましたが次回はクロードの剣技と疾花の反則的な技が炸裂します！もちろんエステルも活躍します！

それではまた次回お会いできることを。

第2章／旅の準備はお早めに（前書き）

どうも、またお会いしましたね。テストが近いため投稿が遅れました、ごめんなさい！

第2章／旅の準備はお早めに

〜　〜　？

・メルティッド大陸南部聖王国ハウリ王都マズルハ

ここは異世界。私、風見疾花（かざみはやか）は今おかしな状況に置かれている。ついこの間まで病院のベッドで寝ているだけの病弱な普通（ちょっと不幸だけど）の女の子だったのにある夜、この世界の神様に喚ばれ勇者として世界を救え、とほとんど一方的に頼まれ小一時間程前にその旅が始まった次第・・・・・・。召喚された遺跡から歩いて十数分ほどしたとこにあるこの国、聖王国ハウリの王都マズルハに私たちはいる。たち、とは私と遺跡で出会った騎士、クロード・C・ラインフォートさんとエステル・ブライトさんのこと。二人の話によるとこのまま城へ行きそこで王女様と会うらしいが・・・・・・堅苦しいのはニガテだなぁー。

「あの、首府城までは歩いて行くんですか？随分遠いように見えるんですけど？」

「ああ、首府城までは自走車に乗っていくんだ、ほらあれだよ。」クロードさんが指差す方から一台のトレーラーの様な車が走ってきた。クロードさんたちの後に続き荷台に乗ってみるとそこには簡素なマットレスが敷かれているだけだった。エステルさんの話によるとここから首府城までは数十分ほどかかるらしい。何やらひそひそ話をしている二人を横目に見ながら私は荷台の手すり（といってもフチに古びた鉄棒を取り付けただけのかなり脆そうな作りだが）の近くに座り、そこから流れていく街並みを眺めていた。でも十数分たった頃にはいつしか街を出て、荷台からみえる景色は翠の草原に変わっていた。ふと空を見上げるとそこには大きな鳥のような何か

がいくつも飛んでいた。
「クロードさん、あれ何ですか？」
「ん、ああ、あれはリュージュだよ。」
「リュージュ？」
「うん、この国にしかない乗り物なんだ。それとあれはエンジンを積んでないんだ。」
「じゃあどうやって飛んでるんですか？」
「風の力だけで、だよ。空を流れる気流を捕まえて飛んでるんだ。」
「へ～、スゴイ・・・！」
それから首府城に着くまで私はずっと空を見上げていたのだった。

？　～　～

・メルティッド大陸南部聖王国ハウリ首府城

首とお尻が痛い。なぜかって？首が痛いのは首府城に着くまでずっと空を見上げていたから、お尻が痛いのは自走車のマットレスが固かったから。まぁ、それはそれとして。首府城に着くとクロードさんが城門のところの兵隊さんと話し、お城の中に入ってエステルさんとクロードさんとはそこで別れた。少しすると二人の兵隊さんが来て、その人たちについていくとひとつの部屋に案内された。部屋に赤い絨毯が引かれており見るからに高級そうな壺や絵が飾られいた。とりあえず気分を落ち着かせようとソファーに座ってみるが逆に柔らか過ぎて落ち着かなかった。すると部屋のドアがノックされる音が聞こえた。
「はい、どうぞ～」
「失礼します、お召し物を持ってまいりました。着替えが終わりましたらお呼び下さい。」
「は、はい。ありがとうございます・・・・・」

入ってきた女性から服を受け取り、女性が出たのを確認してから受け取った服を広げてみる。上半身は白地に青いラインが引かれたシンプルなロングコートと体にピッタリくっつく黒いインナー。下半身はグレーのズボン。着てみるとこれまたサイズはピッタリときた。誰が選んだんだろ？鏡の前に立ち自分の姿を確認してみるとなかなか似合っていると思う。ソファーの上に放り投げていた魔導書を掴み、部屋をでると外で待っていてくれた女性に似合っているとほめられ、照れつつ彼女の後をついていった。・・・・・・・まぁ迷子になりそうにながらだけど・・・。案内されたところにはすでにクロードさんとエステルさんがいた。

「ハヤカ、サイズは大丈夫？」

「はい！ピッタリです。」

「そう、それはよかった。」

「この服って誰が選んでくれたんですか？」

「私だよ。いやーよく似合っているよ～！」

「あ、ありがとうございます！！」

「いいって、いいって。これから王女様に会うんだからこれくらいカッコつけないとね。」

「王女様？ですか？」

「うん、聖王国ハウリ第８７代王女クローディア・Ｓ・ハーディスト陛下だよ。謁見の間に入ったら僕たちと同じように動いて」

なんて話している間に謁見の間っていうところに案内された。そこは広い石畳の床に赤い絨毯が引かれていて、その奥に綺麗に装飾された椅子があってそこにドレスを着た一人の女性が座っていて、その隣には顎にヒゲを蓄えた５０代くらいに見える太ったオッサンとクロードさんと同じような服を着て腰から細身の剣を下げた２０代くらいの女性が立っていた。二人に従い王女様の少し前まで進み、そこで立て膝を着くようにゆっくりと座った。

「クローディア殿下、世界樹（イグドラシル）の使者をお連れしました。」

「ご苦労様でした、その真ん中にいる方ですね。　お名前は？」

「は、はい、風見疾花と申します。」
「私(わたくし)はここ、聖王国ハウリの王女、クローディア・S・ハーディストです。よろしくお願いいたします、ハヤカさん。」
「よろしくお願いします。ところで私は何をすればいいんですか？」
「貴様、陛下に対して無礼であろう！身分をわきまえろ！！」
単刀直入に質問したら隣にいた太ったオッサンに怒られてしまった。
まぁ、そりゃそうか。いきなり段階も踏まずに目的を聞くのはよくないよなぁ～、確かに・・・。
「構いません。」
「し、しかし！」
「構わない、と言っているのです。」
「・・・わかりました・・・。」
わぁお、さすが王女様。一言でオッサンを黙らせちゃった。
「これからどうすればよいか、でしたね。それではまず神君廟へ行くとよいでしょう。そこには『時の羅針盤』があります。きっと貴女の旅の助けになると思います。」
「ですが殿下、神君廟は王族のみが入れる神聖な領域、他の者が立ち入れば・・・・・。」
「それはわかっています、それも含めてです。」
何を含めてだよ、と突っ込みたかったが相手が相手なのでぐっと我慢。ひとまず喉まででかかった言葉を飲み込み話を聞く。
「神君廟で時の羅針盤を手に入れたら報告はしなくても構いません。そのまま旅を始めてください。それと、クロード卿とエステル卿はハヤカさんの護衛をお願いします。あなた方が出会ったのはきっと何かの運命でしょう、二人ともハヤカさんのことをお願いします。」
「「はっ！仰せのままに！！」
こうして私の旅は本格的に始まったのだった。

？　～　～

メルティッド大陸南部聖王国ハウリ領王都マズルハ聖殿騎士団（テンプルナイツ）詰め所

今はとりあえず着替えやその他もろもろを用意するため私たちは首府城から王都にある騎士団の詰め所に向かっている。当然帰りも自走車だったからまたお尻が痛くなったけど行きほどではなかった。それと乗っている間にエステルさんがこの世界についていろいろと教えてくれた。この世界はに5つの大陸があり、私がいるのが一番大きなメルティッド大陸。そしてここを中心に東側にグランセル連邦領のエリン大陸、西側にゼピルム共和国領のゼピルム大陸、北側にアールディオン帝国領のレムリア大陸。南側には謎の霧の壁『ヴァルハラの境界』がある。もともとはハイパボーリアという大陸があったそうだが今はどんどん南下してきたヴァルハラの境界に飲み込まれ幻の大陸となっているらしい。それでメルティッド大陸には3つの国があってひとつがここ聖王国ハウリ。東にグリーテン帝国、北にガリア王国。真ん中から西側には遺跡郡と大平原が広がり、端には海底遺跡へ行くための港があるそうだ。古代技術と機械のグランセル連邦、魔術と剣のゼピルム共和国、鉱石と鍛冶のアールディオン帝国、農業と秩序のガリア王国、漁業と船のグリーテン帝国、そして神話と騎士の聖王国ハウリ。と、このように各国は目立った特徴があるらしい。街の中央部まで行き、自走車を降りてすぐ目の前にある大きな建物へ向かった。ここが騎士団の詰め所なのだろう。

「団長、ただいま戻りました。」

「オッサン、急用で戻ったからね～。」

建物の中にはいってすぐのところにある階段を上り、一番奥の部屋に入る。そこには大きな机があり頬に傷がある男の人が座っていた。

「うむ、そのことは既に姫様から聞いている。旅に出るんだろ？なら私服に着替えていけ。」

「はい、わかっています。それでこの子が。」「おお、その子か！俺はハンニバルという者だ、クロードの上司をやってる。よろしく

な。」
「よろしくお願いします、ハンニバルさん。」
「じゃあ私たちは着替えてくるから、ちょっと待っててね。」
「はい、わかりました。」
そういって二人は部屋から出ていった。ーーーーただエステルさんが
「オッサン、変なコトはするなよ？」
と、笑顔で言い残してだが・・・・・・。
二人が着替えている間に私とハンニバルさんは武器庫へ向かった。
なんでもそんな格好でも丸腰じゃ意味がないらしいということで武器を一つくれるそうだ。でも武器をもらったからって使えるわけないし使う気もない。それに私にはイリスが作ってくれた創成の魔導書ってやつがあるからいらないんだけど・・・・・そういえば使い方きてなかったな・・・・・・。なんて考えを巡らせているうちに目的の場所に到着した。そこは武器庫というよりも宝物がしまってありそうな白い綺麗な建物だった。中に入ると壁には剣や槍、斧、盾などといった装備が掛けられていて床には鎧がおいてあった。
「さて、どれがいい？」
「どれって・・・・・言われても・・・・・・・」
まぁ槍とか斧とかはパス、重そうだし。無難に剣にしようかなぁ。
「じゃあ剣いいです。」
「剣、といわれてもいろいろと種類があるからな・・・・・・・ひとまず見てみるか？」
そう言って私たちは奥にある種類別の武器庫へ向かった。ついたらハンニバルさんが一通りの剣を持ってきてくれたが・・・・・・これまた数の多いこと・・・・
「ねえ、イリスどれがいいと思う？」
「さぁね、どうかしら？結局使うのは貴女なんだから自分で決めた方がいいんじゃない？ま、どうしてもっていうなら決めてあげてもいいけど。」
「・・・・・・おまえさん、取り憑かれてるのか？」

「あ、ああ、違います、彼女は世界樹(イグドラシル)の化身、だっけ？」
「まあそんなところよ、イリスよ。よろしくね。」
「そうか、ハンニバルだ、よろしくな。」
それから数分間、いろいろな剣を見せてもらたが結局最初に見たミドルソードというやつに決めた。持ってみるとずしりと重く、とても振り回せそうにない。
「それでいいか？」
「いえ、あの、やっぱりいいです。なんか使いこなせそうにないので・・・。」
「クスクス、やっぱり？いくら体が強くなっても使い方がわからなくちゃねぇ？」
頭上でクスクス笑いながら哀れみの目でこちらを見るイリス。わかっていたけどなんかムカツク・・・。わかっていたなら最初に忠告ぐらいしてくれてもいいじゃない！
「ま、そのためにこれがあるんだけどね。疾花、本を左手に持って右手を剣にかざして。この本の使い方を教えるから。」
「え、う、うん」
言われたとおりに左手に魔導書、右手を剣にかざす。
「情報(レコード)記録といいなさい。それで終わりよ。」
胡散臭さＭＡＸだが今までに起こったことから考えるとあり得なくない。とりあえずやってみる。
「情報(レコード)記録！！」
次の瞬間、机に置いてあった剣が光り出し螺旋になって私の手に吸い込まれていった。
「え～っと、ねぇイリス、剣はどこいったの？」
「本を開いてさっきの剣をイメージしてみなさい、本が勝手に見つけてくれるから。それでページが出てきたら一番上の文章をなぞってみなさい。」
言われた通りに本を開き、さっきの剣をイメージしてみる。すると勝手に本のページがめくられはじめ、あるページで止まった。そこ

には剣の絵と謎の文字が描かれていた。一番上の文章をなぞってみるとなんとそのページ、というか剣の絵が光りそこから柄と鍔が飛び出してきた！引き抜いてみるとそれはさっき私が吸い込んだ剣と全く同じ形なのにものすごく軽く、使い方（？）まで把握していた！

「お、おいおい、何なんだ今のは！？いきなり剣が光って消えたと思ったら今度は本から出てくるなんて・・・・一体どんな原理だよ、そりゃ！？」

「ええと、その、私にも説明して欲しいんだけど。」

「そうね、簡単にいうと、まず本が物質を魔導力で原子レベルまで分解してそれをページに情報記録（レコード）するの。そして貴女が起動プログラムをなぞることでそれを元の形に戻して本から出すのよ。で、ここに記録されたものは貴女の脳内にも記録されるから使い方が分かるってワケ。因みに軽い理由は貴女の体にあわせて中身を作り替えてるから。」

「え～っと、つまりここに記録されてれば何でも使いこなせるってワケ？」

「ま、そういうことね。」

「・・・・・・・ズルくない？」

「勇者だもん、いいじゃない。」

あ、ダメだ、この人。性格がどうとかじゃなくてもっと根本的なトコからダメだ・・・・・・。

「く、詳しいことはよくわからんが、とにかく便利なんだな。」なんかハンニバルさん納得しちゃったし！？とはいっても便利なのは助かるけど、これはちょっと気が引けるなぁ～。まぁそんなこんなで剣を手に入れ、クロードさんたちと合流するべく広間へ向かった。

第2章／旅の準備はお早めに（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました！さて前回予告しましたバトルは書けませんでした、ごめんなさい！次こそはクロードの剣技が光ります！

・次回予告

神君廟へ突入した疾花たち。しかし、三人を待ち受けていたのは無数の魔導兵だった！疾花たちは時の羅針盤を無事に手に入れることはできるのか！？

第3章／要するに墓荒らしだよね？（前書き）

こんばんわ！やっとテストが終わり投稿出来ました！それではどうぞ～！

第3章／要するに墓荒らしだよね？

～　　～　　？

メルティッド大陸南部聖王国ハウリ領王都マズルハ

どーも、風見疾花（かざみはやか）です。私は今、異世界にいます。ま、何を基準に異世界と言うのかはわからないけどとにかく異世界にいます。理由に関してはプロローグ～第1章を参照ください、って何話してんだ私は？まぁそんなわけで異世界にいます。・・・・・・しつこいですね、ごめんなさい・・・・・。

ここは私が暮らしていた科学技術が進歩した世界とは違い、一度科学文明が滅び、新しく魔術という不思議な技術を基盤にした世界。そしてこの世界はもう一度滅びようとしているらしく、それを止めるため私が来たってワケ。それで今はどうしているかというと二人の騎士、クロードさんとエステルさんと共に第一の目的地、神君廟へ向かうための準備をしているところだ。

「お前ら、無事に帰ってこいよ。」

「はい、行ってきます。」

「そんなに心配しなくてもへーきだよ！私たちの実力は知ってるでしょ？」

「バカモン、油断して足下すくわれても知らんぞ！」

「あの、ハンニバルさん、剣ありがとうございました、大事に使わせてもらいます。」

「うむ、達者でな。ハヤカ、お前さんには酷なことかもしれんがどうかこの世界を守ってくれ。必要なものがあったら俺に連絡してく

れ、出来るだけ支援してやる。頼んだぞ。」
「はい！任せて下さい！」
「いい返事だ！それとクロード、これを持っていけ。」
そう言って一つのずしりと重い袋を渡してくれた。開けてみると、そこには大量の金貨が！！
「お、お金！こんなに沢山、どうして？」
「旅をするには必要だろ？餞別だ。」
「おお！オッサン太っ腹～！」
「これくらいしか俺にはしてやれることがないからな。」
それから神君廟のカギを預かり、私たちは旅路についた。神君廟まではここ王都マズルハから徒歩で半日程度のところにあるそうだ。ただ人の寄り付かないミエルの森の中らしく、定期自走車のが走っていないため今から行くとどこかで野宿しなくてはいけないそうだ。だが、ミエルの森ではよく人外が出没するみたいで危険なため途中の宿屋で一泊する予定。っていっても日没まではまだ時間があるみたいなので街で今後の買い出しやらなんやらを済ましてしまうことに、臨時収入もあったことだし。
「とりあえず僕は食べ物を買ってくるから、二人は適当にブラブラしててていいよ。」
「えー、私も行く！」
「ダメだよ、ハヤカを一人にしちゃ。まだこっちに慣れてないんだから。」
「あ、大丈夫ですよ、宿の場所も覚えましたから。二人で行ってきてください。」
「う～ん、わかった。じゃあ日が暮れるまでに戻ってきて、いろいろ話したいことがあるから。」
「はい、わかりました。」
「ありがとね、ハヤカちゃん！」
大通りの交差点のところで二人と別れ、私は雑貨屋の並ぶ商店街へ向かった。お金は別れる直前にクロードさんから一掴みほど金貨を

もらったから大丈夫。因みにこっちの世界ではどこの国へいってもお金の単位はフォルらしく、単位もこれだけみたいですぐに覚えられそう。もらった金貨には１０００って書かれているから１０００フォルなんだろう。それが２３枚、つまり２３０００フォル持ってるのか。商店街に並んでいる品物を見てみるとだいたい１００～２００フォルくらい。こりゃ大金持ちだわ・・・・・。それからとにかく気になったものがあったら片っ端からお買い上げ。（主に食べ物）それでも相当余ってしまった。これからどうするか悩んでいるとイリスが話しかけてきた。

（買うものが無くなったなら魔術書でも買ったら？）

（魔術書ってなに？）

（魔術の使い方が書いてある本のことよ。本屋に行けばあるんじゃない？）

商店街を探してみるがなかなか見つからない。道行く人に聞いてみるとここの路地裏に古びた店が一軒、もうすこし進んだところにある広場の近くに業界最大手の店が一軒あるそうだ。

（どっちがいいかな？）

（時間もあることだし両方行ってみたら？）

（それもそうだね。）

そんなわけでまず店と店の間を歩き、路地裏の本屋を目指す。表通りの喧騒とは裏腹に店と店の間はひっそりと静まり返り、どこか違うところにいるような感覚さえ覚えてくる。普通なら浮浪者がいてもおかしくないのに人は誰もいない、いるといえばゴミ箱を漁る野良犬か野良猫。本当にこんなところに本屋なんてあるのかなぁ～？少し歩くと路地裏に出た。そこは店や家などの影に覆われ昼間だというのに日がほとんどさしていなかった。さっきの店と店の間とは違いこっちには生活感があり、所々に浮浪者が座ってこちらをじっと見つめてくる。そのイヤな視線を感じつつ、本屋を探す。お、あったあった、あれだ。扉を開き中へ入るとボロボロの外見とは違い、店内はなかなかしっかりしていた。

「いらっしゃ～い。おや、これは珍しい、こんなかわいらしいお嬢さんが一人でこんなところまでくるとは。」
奥のほうに机があり、そこには店主のおじいさんが座っていた。
「あの、魔術書を探してるんですけどありますか？」
「魔術書でしたらそこの棚の上から2段目までありますから自由に見ていって下さい。」
おじいさんが指差した本棚の1番上から2段目を見てみるとボロボロになった本がいくつも並んでいた。古本屋なのかな、ここは？そこからいくつか手に取り見みる。
（なんかマニアックなものばっかりね。）
（そうなの？）
（ええ、だって『無差別攻撃魔術全集』だなんて一般人は覚える必要ないでしょ？）
イリスの言う通りここの本棚には『特集、拷問魔術！』だとか『これでバッチリ、あなたも今日から黒魔術士』だとか『善人の騙し方・パート？』（なんだりゃ？）なんて胡散臭くマニアックで普通じゃない本ばっかりだった。まぁそのなかにも『結界魔術全集』とか『補助系魔術大全』ほんの少しまともなものを見つけたのでそれと気になったマニアックな魔術書もいくつか購入。（やっぱり古本屋だったらしく格安で）本屋から出て路地裏に戻る。来たところまで戻るのはなんかダルいのでこのまま進み違うところから表通りに出ることに。外は日が暮れかかっていて日のささない路地裏は暗く、まるであのときの病院を思い出すな～、早く表通りに戻ろ。両手に本を抱えたたま小走りで店と店の間を通り抜け表通りへ。思ったより長くあの店にいたみたいで広場の本屋まで行っている時間はなかった。

～　　～　　？

宿に戻った頃には日はほとんど暮れていて街灯がつき始めていた。
「ただいま戻りました！」
「あ、お帰りなさい。街はどうだった？」
「すっごく楽しかったです！あとクロードさん、お金余ったんで返しますね。」
「返さなくて大丈夫だよ、ハヤカが持ってて。それじゃ食事にでも行こうか？」
「はい。」
宿の中にある食堂で夕食をとる。今夜のメニューはパンとスープ、魚のムニエルのようなもの。こっちにくるまではずっと味の薄い病院食ばっかりで満足できなかったけど体も治り自由に食事が出来ることがなんかうれしく（街で散々食べてたけど）けっこうおかわりしてしまった（我ながらよく入ったな・・・）。そのあと部屋に戻り一服し、クロードさんの話を聞くことにした。
「さて、ハヤカ、この世界の詳しいことはよく知らないよね？」
「はい、わかりません。っていうかなんでイリスは何も教えてくれないの？」
「旅ってものは普通自分で情報を集めるものでしょ、違う？」
「まぁまぁ、二人とも。それについてこれから話すよ。まず、なんでこの世界が滅ぼうとしているかだけど、結論から言うとヴァルハラの境界が現れたから。この霧の壁は旧文明が滅んだ時代にも現れていたって文献にのこってる。そして現に北の大陸、ハイパボーリアが境界に飲み込まれ消息不明になった、もちろん調査隊も送ったけどその調査隊も行方不明。それでいま世界は結束しつつあるんだ。つい最近ハウリと隣国ガリアは同盟を結び、それを皮切りに東のグランセル連邦、北のアールディオンも同盟を結んだ。」
「あの、グリーテンとゼピルムは結んでないんですか？」
「うん、ゼピルムは国の理念に背くからって。でもグリーテンは不明。話を戻すけど世界がまとまってきたお陰で色々な文献が見つか

ってね、そこからひとつの結論が出たんだ。世界を救う為には異世界からの救世主と世界樹（イグドラシル）の方舟が必要らしい、って。そしてここに異世界からの救世主がいる。ここまではわかったね？」
「はい、それで方舟はまだ見つかってないんですよね？」
「うん、まだね。ねぇイリス、何か知らない？」
「ええ、知ってるわよ。懐かしいわね、アルセイユとは。」
「アルセイユ？」
「あなたたちが方舟と呼んでるものの名前よ。」
それから数時間イリスとクロードさんからこの世界のことを教えてもらった。話が終わったら部屋に戻って買ってきた本と向き合う。
「これってレコードすればいいの？」
「そうだけど、あの、疾花もしかして全部いっぺんにレコードするつもり？」
「レコード！！」
「ちょ、ちょっと待ちなさい！」
私の右手から光が出て本を全部レコードし終えた瞬間、意識がパッタリと途絶えた・・・・・・・

～？～

熱が出た。結論からいうと頭に情報を書き込みすぎて頭が処理しきれなかったらしい。お陰で1日無駄に過ごしてしまった。情けない・・・・・・・

メルティッド大陸南部聖王国ハウリ領神君廟周辺

昨日の熱の事情を話し、なんとか二人を説得して神君廟へ向けて移動を始めた。宿を8時ごろに出て、途中にある休憩所でお昼を食べ

て目的地に着いたのがだいたい2時くらいかな？林をかき分け神君廟の前までいくとそこには白いドレスのような服を着た女性が立っていた。
「遅かったですわね、クロード、エステルさん。待ちくたびれましたわ。」
「ヴァ、ヴァルナ様！どうしてこんなところに！？」
（あの、クロードさん、あの人誰ですか？）
（彼女はヴァルナ・V・ラインフォート。色持ちの代行者（ドミニオン）で僕の姉さんだよ。）
確かによく見ると金色がかった髪で顔立ちもよく似ているな、しかもかなりの美人だ・・・・
（ああ見えても僕なんかよりずっと強いよ、二つ名は刃姫（プリンセスエッジ）。）
「貴女がハヤカさんですわね、ヴァルナ・V・ラインフォートと申しますわ。因みにクロードの姉で色持ちのドミニオンです、よろしくお願いしますわ。」
「はい、よろしくお願いします。ところでなぜここに？」
「助っ人ですわ、ここの中は危険が一杯ですから、といってもそこまで援護しなくて済みそうですね。さ、いきましょ。」
そんなわけでハンニバルさんから預かった鍵で扉を開け、なかにはいるとそこには地下へ続く階段があった。真っ暗で何も見えなかったので昨日覚えた魔術の中から〈ライト〉を使い、回りを照らしながら進んでいった。少し進むと一番底に着いたみたいで広い空間が広がっていた。
「さて、ここからが本当の入り口ですわ。気を引き閉めて。」
「はい！」
「OKだよ。」
「いつでも行けます！」
みんなが自分の獲物を構える！私は勿論もらったミドルソード、クロードさんは腰から下げていた2本の剣、エステルさんはガントレットを装着した両手、ヴァルナさんは・・・・・って何も構えてな

い！まさか丸腰！？
「あ、あの、ヴァルナさん、構えなくていいんですか？」
「ええ、これが私の戦闘スタイルですから。」
ならいいんだけど・・・・。目の前に見える大きな門をくぐり抜け、奥へ進んでいくと石像が並ぶ広い通路になっていた。と、突然脇にあっあ騎士の格好をした石像が動き出した！
「な、何ですかこれ！」
「魔導兵、ここを守ってるゴーレムだよ！下がって、コイツは僕がやる！」
そう言ってクロードさんが突っ込んでいく、それと同時に詠唱を開始する！
「祝福を与えし光の女神よ、我が刃に光を纏い邪を滅せよ！輝け〈ブレードリアクター〉！！」
次の瞬間、クロードさんの持った剣の刃が輝き始める。魔導兵が横凪ぎの攻撃を繰り出すがいとも簡単に回避し、一瞬で懐へ飛び込んだ。さらにここからが凄かった、懐へ飛び込んだと思ったら目にも止まらぬ早さで魔導兵を切り刻んだ！！
「ふぅ、これでよし。」
「す、凄いです！カッコいいです！」
「まだ気を抜かないで！来ますわよ！」
そういわれて向こうをみるとゾロゾロと魔導兵が集まってきた、ざっと数えて３０くらいかな？っなんてやってる場合じゃない！！この数を相手にするのはムリだよ！
「疾花、魔術を使いなさい！昨日覚えた攻撃魔術！」
「りょ、りょーかい！・・・・・・・あった、よし、いくぞぉー！！　光よ、勇者の名の元に！闇を切り裂き邪を滅する聖なる矢を！〈ライトニングエクスプロージョン〉！！」
手のひらに凝縮された光の玉は詠唱が終わると物凄い速度で魔導兵の方へ進んでいった！そしてその光に触れた魔導兵たちは一瞬で灰に変わってしまい、その瞬間玉は大爆発してすべてを吹き飛ばした！

「い、今のが光輝系魔術最高位の〈ライトニングエクスプロージョン〉！？すっごいわー・・・・」
「流石勇者ですわ、頼もしいですわ。」
「いやぁそれほどでも。」
なんとかひとつめの罠を切り抜けた私たちはさらに奥を目指して歩みをすすめるのだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｎｔｉｎｕｅｄ・・・・・

第3章／要するに墓荒らしだよね？（後書き）

やっと書けた戦闘シーン、しかし疾花のチート魔術のお陰で一瞬で終了！悲しい、もっと文才があれば・・・・ま、作者の後悔は置いておいて。次回は初っぱなから戦闘シーンです！頑張ります！

次回予定

神君廟の最深部までたどり着いた疾花たち。そこで待ち受けていたのは巨大な自律機動兵器だった！

第４章／直視の眼、覚醒。（前書き）

少し遅れ気味になりましたが投稿できました。
それではどうぞ！

第４章／直視の眼、覚醒。

〜　〜　？

メルティッド大陸南部聖王国ハウリ領神君廟内

襲いかかってくる魔導兵を私の魔術とクロードさんの剣術を駆使して退けながら奥へ進んでいく。みんなには言えないけどはじめて魔術を使っていてわかったことが一つある。とにかく疲れる・・・・・・。気づかれないようにイリスに原因を聞いてみると魔術は自分の体力と体内に存在する魔導力子を使い、発動するものだからだそうだ。ここの中は魔導力子が満ち溢れているそうで大気中から吸収できるからそっちは問題ないそうだが体力に関しては自然に回復するのを待つしかないそうだ。といっても危険地帯のど真ん中で休めるワケもなく、早いところ攻略して脱出するのがベストらしい。たいぶ息が上がってきたところでエステルさんとポジションを交換し、後ろへさかる。

（ま、魔術ってこんなに疲れるものなの？）

（あそこの本屋で買った魔術書が全部高位魔術書だったみたいね。強力な魔術は大量の体力と魔導力子を消費するから貴女の体力が追いつかなかったんじゃないかしら？）

（身体能力は強化してくれたんでしょ？）

（そう言われてもねぇ〜？〈ライトニングエクスプロージョン〉とか〈フレアアロー・バースト〉なんて高位魔術を連発すれば体力だってすぐに底をつくわ。ま、あとは“慣れ”かな？）

つまりもっとランクが低い魔術を使えば体力の消費が抑えられるワケか。そうしているうちにまた広い通路に出る。いかにも罠ってカ

ンジだなー・・・・・。
「見るからに罠ってカンジですわね。どうします？」
「でもヴァルナ様、迂回していく道は無さそうですよ？」
「そうだね、進むしかなさそうだね。ハヤカはどう思う？」
「私も進んだほうがいいと思います。例え罠でも私たちなら突破できますよ。」
「頼もしいですわね。でもあなた、まだ魔術を使えまして？」
「そ、それは・・・・」
「仕方ないですよ、あれだけ高位魔術を連発してたんですから。」
「そうだよ姉さん、ハヤカのお陰でどれだけ楽だったか。っていうか姉さん、全く戦ってないじゃかいか！」
「まーまー、二人とも落ち着いて下さい、とにかく進みましょう。」
ケンカを始めそうな勢いの二人をなんとかおさめて通路を歩きだす。通路は見た目よりながく、なかなか向こうの扉までたどり着けなかった。ただ、なーんか嫌な予感がするんだよなー。それから数分後、見事に予感的中！目の前から大量の魔導兵が押し寄せてきた！
「ヤバいね、これは。ハヤカ、魔術は？」
「な、なんとかいけます！」
「後ろからもきたよ！どーするの！？」
絶対絶命のピンチ、私の魔術は連発できない。どうしよう・・・・。
「仕方ありませんわね、ここは私が引き受けます。皆さんはそのスキに扉のむこうへ。」
「ダメだ、危険すぎる！」
「クロード、私の名を忘れたのですか？紫紺石（アメジスト）の名を冠する色持ちの代行者（ドミニオン）ですわよ。この程度の連中に負けるハズありませんわ。」
「・・・・・・頼みます、行くよみんな！」
「はい！」
「りょーかい！」
ヴァルナさんが目の前の魔導兵に突っ込むのと同時に私たちも走り出す。どうやったか知らないがヴァルナさんが通ったあとには切り

刻まれた魔導兵が転がっていた。扉に着くと切り刻む原理がわかった、刃だ。服のあちこちに隠した剣刀類を駆使して嵐のような斬撃を放っていた。どこからか取り出したロングソードを手にしたヴァルナさんが振り向く。
「さぁ、行って！」
扉を開け放ち、中へ滑り込んで後ろを振り向いたときにはすでに扉は閉まっていた。扉の中は真っ暗で何も見えない。すると壁にかけられた松明が燃え初め、周りが見えるようになった。
「なんというか・・・・・・だだっ広いね。」
「ですねー・・・・。」
照らし出された空間はなにやらドーム状の形をしていてまるでスタジアムのようだ。それで真ん中には一体の戦斧を持った大きな石像が置かれていた。まさかアレと戦えっていうのか・・・・・なんて考えているうちに目が光り、動き出す！
「・・・・最悪だ、あんなものがあるなんて、聞いてない・・・・。」
「な、何なんですか、あれ？」
「大型の人型自律機動兵器・オベリスクだよ！本当は海底遺跡にしかないはずなのに、どうして！？」
「ヤバい、くるよ！」
戦斧を振り上げた不気味な顔をした巨人が目の前にせまる。私たちは咄嗟に三方向に飛び退くが戦斧が地面をえぐった衝撃で軽く吹き飛ばされる。そのせいで落としてしまった魔導書を拾い上げ、反撃のために特大の魔術を探す。・・・・・・あった！これだ！
「黄昏を喰らいし夢幻の闇よ、汝が堕天の翼となり邪なる者を蒼穹の狭間へと導け、時に埋もれし偉大なる汝の名において我ここに闇に誓わん、我等が前に立ち塞がれし全てのものを滅せし光を！！喰らえ、第七真音律（エデンコード）！」
構えた手のひらからいくつもの澄んだ淡い紫色の光が迸り、オベリスクを包み、侵食を始める！しかし、侵食は途中でとまってしまった。原因は簡単。私の体力が限界に近いからだ。顔を上げた瞬間、

太い三本指の腕が迫り、私の体は宙を舞った。そして気が付いた時には地面に叩きつけられていた。
「ハヤカちゃん！！くっそぉ！よくも！！」
「ダメだ、エステル！」
朦朧とする意識の中、二人の声が頭に響く。そうだ、まだ戦いは続いてる。助けなきゃ・・・・でもどうやって？魔術が使えない上にこんな体でどうしろと？ねぇ、イリス？
「うふふ、困ってるわね。助けて欲しい？」
ーーーーーー欲しいよ、とっても。
「じゃあ立ちなさい、戦うのは貴女よ。」
ーーーーーーわかってる、今立つから。
「目の前のあのデカブツ、見えるわね？よーく見なさい、見たら願って、今一番視たいものを。そして、思うがままに殺りなさい。」
ーーーーーーわかったよ、殺ればいいんでしょ、殺れば！！
その瞬間、私は懐からイリスにもらった古びたナイフを抜き払い、走り出す。一瞬で間合いを詰め、オベリスクの懐へ入り込む。そして体の中心に視える渦に自分でも怖いくらい感情を込めないでナイフを突き立てる。それだけでオベリスクは動かなくなり、その場に倒れた。
「ふぅ、これでおしまい。クロードさん、エステルさん、行きましょう。」
「ちょ、ちょっと待って！今どーやってアイツ倒したの！？」
「え？倒れた時にイリスが助言してくれただけですよ？」
「助言って・・・・・・それだけであれを倒したの？」
「はい、なんかあれの中心に渦みたいのが見えてそれをこれで刺したら。」
「ねぇ、ハヤカちゃん、渦って何？」
「・・・・・・さぁ？なんでしょう？イリスはわかる？」
「きっと“原因”でしょ。さっきあれを見たとき何を願った？」
「えっと、一番壊れやすいところが視たいって思ったよ。」

「なら“原因”で正解みたいね。簡単に説明するけど貴女の目には特殊な加工をしておいたわ。その結果できたのが貴女が望むものを視ることができる《直視の眼》よ。」
「じゃあ私が望めばどんなものでも視ることができるの？」
「そういうこと。さ、先に進みましょ。」
説明は後で聞くとして私たちはここの奥にある宝物庫へ続く扉を開け，通路をあるきだす。二人は体は大丈夫だったかって心配してくれたが魔導繊維製の服と体が丈夫だったお陰でピンピンしている。これはイリスと王女様に感謝かな？それから少しすると追いかけてきたヴァルナさんとも合流でき、そこで少し休憩してから宝物庫へ向かった。宝物の中はとにかく埃っぽかった。そりゃいままでほとんど開けることがないからってこれはヒドイんじゃ・・・・・。って、はじっこに放置されてたきっと綺麗だったはずの剣なんて錆び付いてその辺にあるナマクラと変わらないじゃん！ヒドイ、ヒド過ぎる・・・・・。
「え～っと、時の羅針盤ってどれだろう？」
「なんというか、ガラクタ置き場ってカンジですわね・・・・・。」
「・・・・僕も同感だよ、なんか無性に悲しい・・・。」
「ま、まーまー、根気よく探しましょ。きっと見つかりますよ。」
「でもハヤカちゃん、どんなやつか知って？」
「それはー・・・・・。」
「これじゃないかしら？疾花、この文字読めるでしょ？」
イリスが見つけたガラス台は埃まみれで中に入ったものはわからなかったが台に刻まれた文字だけはかろうじて読めた。っていうなんで日本語が書かれてるわけ？明らかにおかしいでしょ・・・・・。
「え～、なになに、世界の理をねじ曲げしものよ、我の導きに従い帆を進めよ。汝の・・・・・・。」
「どうしたの？」
「これから先は削れて読めないんです。でもこれが時の羅針盤で間違いなさそうですね。」

「なら、早いとこもらってここから出ましょう、埃っぽくて仕方ありませんわ。」
「そうですね、じゃあ早速、・・・・・レコード！」
宝物庫で羅針盤を手に入れて、それから来た道を戻り地上へ出た。
まぁ帰りも魔導兵に襲われたけど・・・・・。ヴァルナさんは他の仕事があるからってことでその場で別れ、私たちは暗くなる前に宿屋に戻ることにした。でも案の定宿屋に帰りつく前に日が暮れてしまい、暗い夜道をトボトボ歩いたんだけどね。それから私たちは戻った途端にベッドへ。疲労困憊だったから食事もとらずに朝まで爆睡することに・・・・。

～　　～　　？

メルティッド大陸南部聖王国ハウリ領王都マズルハ

次の日の朝、十時くらいまで部屋でのんびりして（ていいのか？）それからみんなで部屋のリビングに集まった。時の羅針盤を使って今後の目的地を決めるためだ。
「さて、集まったのはいいけど一体これはどうやって使うの？」
「まず平行なとこに置いて、魔導力を流し込むみたいです。」
「とりあえずやってみようよ。」
「じゃあハヤカ、お願い。」
本の中から羅針盤をとりだし、テーブルの上に置いてそれから手をかざし、魔導力を流し込む。すると真ん中にからぶら下がった水晶のような玉が光り出してなぜか日本語が浮かび、その下にある針が西を指す。
「・・・・・なんて書いてあるの？」
「えっと西域を統べし聖女に会え・・・・・だそうです、どういう意味ですか？」

「西ってことだから・・・きっとゼピルム共和国に行けってことじゃない？」
「でも聖女って誰のことか心当たりあんの？」
「多分聖魔王のことだよ、今は女性だったハズだから。」
「それにしてもなんかアバウト過ぎませんか？」
「同感、でもこれ以外にアテはないんだし行くしかないよ。」
そんなわけで荷物をまとめ、宿屋を出る。ゼピルム共和国には飛空艇に乗らなければならないらしいのでまずは港があるガリア王国へ向かうことになった。ガリア王国まではここ王都マズルハから途中にある交易都市ペターニまでは定期自走車が走ってそうだがそこから先は徒歩で行くからガリア王国に着くのはだいたい2～3日くらいかかるそうだ。まあ、気楽に頑張っていこ！！

第４章／直視の眼、覚醒。（後書き）

今回も無事に終わらせることができました！
なんというか今回も戦闘シーンがグダグダでしたが見捨てないでください、次回からも頑張っていくのでお願いします！

次回予告
交易都市ペターニに無事到着した疾花たち。しかし一休みするために入った酒場でケンカが勃発、そこでした賭けでなぜか盗賊退治をするハメに！？そして新たな仲間が・・・・？

第5章／カン違いはケンカのもと（前書き）

ごめんなさい！！多々事情がありまして更新が遅れてしまいました、結構急いで書いたので誤字脱字や変な言い回しなどがあるかもしれません！見つけたら指摘お願いします。
それではどうぞ！

第5章／カン違いはケンカのもと

〜?〜

メルティッド大陸南部聖王国ハウリ領交易都市ペターニ周辺

ここは私たちが暮らす現代世界とちょっと違った世界。普通だったら行けないけど私、風見（かざみ）疾花（はやか）はとある理由でこっちの世界へ来てしまった。その理由とは世界を救うこと。もとの世界に帰るため、そして世界を救うために旅に出た私とクロードさん、エステルさんたちは第一の目的地ゼピルム共和国へ向かうため、飛空艇の発着所のあるガリア王国を目指していた。いまは王都マズルハからガリア王国との間にある最後の街、交易都市ペターニにいる。マズルハからペターニまでは自走車が走っていたがここからガリアの間は中原と呼ばれるどこの国家にも属さない中立地帯でどこの国の自走車も走っていないそうだ。そのためペターニからガリアまでは徒歩で行かなくてはいけない。そのため今はペターニで食料などの買い出しをしているところだ。

「さて、だいたいのものは買ったしどうしようか？」

「少しどこかで休憩していかない？今までずっと歩きっぱなし乗りっぱなしで疲れたじゃん。」

「あ、いいですね。賛成です！」

「まあ、時間もあることだし、いいか。どこに行く？」

どこで休むか決めるべくしばし私たちはまた歩くことになった。結局1時間ほど歩き回って、食事を兼ねて酒場へ入った。中では昼間だというのにおじさんたちがバカ騒ぎしながら酒を飲んでいた。仕事しろよ、オヤジ共・・・・・。なんて面と向かって言えるハズも

なく、横目で見ながらカウンターに座る。メニューを見るとそこには軽食類やアルコールの入っていない飲み物もあるみたいだ。その中から適当に注文し、料理が出てくるのを待つ。それから一通りの食事を終えてカウンターに座りながら雑談を始めていた。
「ねぇクロード、ゼピルムにいってもさぁ聖魔王様に会えるの？」
「普通だったら無理だろう、あそこは結構秘密主義だったりするからね。きっとハウリからの使者ってことが証明できれば会えるだろうけど・・・・・」
「そりゃあ無理ね。どうしよっか、今から戻ると半日近く足止め食らうわよ？」
「あの、ハンニバルさんに頼むことってできませんか？ほら旅に出るときに何かあったら連絡しろっていってたじゃないですか。」
「そっか！郵便局で伝書鳩を借りて連絡すれば「ぎゃはははははは！！」じゃん！」
「あー、今なんていったの？」
「だから伝しょ「はっははははっはは！！」だって。」
「周りがうるさくってよ「ぎゃあああああはははは！！」。」
酒を飲んでいるオジサンたちの笑い声がうるさくとても話ができる状況じゃない。クロードさんは仕方なさそうな顔をしているがエステルさんはすでにキレそう。まぁ実際私も相当頭にきている、だからといって文句を言うわけにもいかないのでガマンしていたけど残念ながらエステルさんはガマンできなかったようだ。
「ちょっと、オッサンども！ぎゃーぎゃーうっさいんだよ！！騒ぐんだったら外でやってくんない！？」
「あぁ！？何だと！てめぇまだガキだろ、ママのところへ帰ってミルクでも飲んでろ！」
「な、なんだとぉ！！お前今すぐ表に出ろ！」
「ハッ、おもしれぇ！傭兵にケンカ売ったこと後悔するんじゃねぇぞ！」
「上等だ！！騎士に刃向かったこと後悔させてやる！！」

あーあー、ケンカになっちゃった・・・・・クロードさんを見ると「またやってるよ・・・・」みたいな顔をして頭を押さえていた。ってそんなことしてないで止めなきゃ！！そうしているうちにまた違う方向に話が進んでいく・・・・・・・。

「騎士ぃ？お前が？」

「そうよ、何か文句あるの？」

「ぷっ、ひゃぁはははっはははは！！お前みたいなガキが騎士だぁ？はっはははは！！お笑いだな、なぁお前ら！」

「っく！」

リーダーのようなオッサンがテーブルに座っているほかのオッサンに問いかけるとそこからも笑いが起こる。なんかカチンときた、あのとき遺跡で私を助けてくれたのは彼女だ。それを馬鹿にされるのはイヤだった。

「やめてください！エステルさんは立派な騎士です！！」

「ハヤカちゃん・・・・・」

「だったら証明してみろ。そうだな・・・・・最近この辺りで盗賊が出てるんだ、そいつらを4日以内に捕まえてみろ。そうすりゃ騎士だって認めてやるよ。」

「わかったよ、やってやろうじゃない！！」

「ちょ、ちょっとエステル！？」

「うっさい！アンタは黙ってなさい！！それとも、盗賊の被害に苦しんでる人たちを見捨てる気！？」

「それは・・・・・・。」

「へっへへ、じゃあ決まりだな。今から4日目の日の出までだからな～。せいぜい頑張れよ、お嬢ちゃん。」

そう言ってオッサンたちは酒場から出ていった。傭兵だかなんだか知らないけど私たちにケンカ売ったことを後悔させてやる！怒り心頭の私たち（怒ってるのは私とエステルさんの2人だけたけど）にカウンターから酒場のマスターがおずおずと声をかけてきた。

「お、お嬢ちゃんたちあいつらが何者か知ってるのかい？」

「知らないわよ、成り上がりの傭兵風情でしょ？」
「知らないなら教えてあげるけど、あいつらはこの辺じゃ有名な〈ブラックハウンズ〉っていう傭兵団だ。ペターニの騎士団も一目置いている奴らさ。」
「じ、じゃあ僕たちはそんな奴らにケンカ売ったってことですか！？」
「そうなるな。」
「何よ！怖じ気づいたの！？」
「そうじゃないけど・・・。」
ここでうだうだしていても仕方がない。酒場から出て街の中心部にある騎士ギルドへ向かった。街はなかなか活気づいていたけど商店街の露店にはほとんど品物が並んでいなかった。きっと盗賊の影響があるんだろうな。騎士ギルドに着くととある張り紙があった。『しばらくお休みします。』、と・・・・・・。
「ふっっっっざけんなっっ！！！！休みってどーゆう了見だゴラァ！！開けんかいボケェ！！」
「エステル、言葉づかい変わってるよ・・・・・。」
「何で休みなんでしょうか？」
「おや、あんたたち。街の外から来たのかい？」
騎士ギルドの前で立ち往生していると近くを通りかかったおじいさんが声をかけてきた。
「どうして休みなのか知ってるんですか？」
「どうやら最近出ている盗賊どもに手を焼いているみたいでな、ついこの間すこし遠くまで遠征にいったみたいなんだ。」
「そっか～、じゃあ聞き込みでもしてみる？」
「そうだね。ここにいても仕方ないし。おじいさん、ありがとうございました。」
「いやいや、お礼をしてもらうほどのことなどしていないよ、それじゃあ。」
おじいさんと別れ、街の中をうろつきながら盗賊の情報を集めて回

った。その結果、ガリア方向から来る運送用自走車や馬車がよく狙われているそうだ。まだアジトは割れていないそうだがだいたいの予想はついているらしい。ペターニの騎士団は傭兵たちに協力を募り、そこを一斉摘発するべく2日前に街から出ていったそうだ。私たちも独自の調査をするため宿屋で一泊して翌日、ガリア方向の中原へ向かった。

〜?〜

メルティッド大陸南西部交易都市ペターニ〜ガリア王国間中原

街で得た情報を元に昨日の夜のうちにクロードさんが作ってくれた地図を見ながら事件現場を回ってみるが成果は全く無かった。ってちょっと探した程度でしっぽを出すようならもう騎士団に捕まってるかー。結局何の手がかりも得られず1日目が終わった。歩き疲れて宿屋に帰ってくると、ある興味深い話を聞く。盗賊はよく東の方に広がる森から出てくるらしい、と。昨日の情報ではペターニから半日ほど歩いたところにある廃村にいるって聞いたけどそっちにはいないみたいだ。それに盗賊が出没する時間帯は午前6〜8時までの間らしい。2日目はその時間に合わせ、街を出た。すると道から少し外れたところに壊れた馬車が横たわっていた！

「これは酷い・・・・。」

「クロード、中に人はいないみたいだよ。」

「殺された跡は無いみたい、きっとさらわれたんだろうな。ハヤカ、魔術で何か分かる？」

「ちょっと待ってください。・・・・サーチ！」

壊れた馬車に手をかざし、詠唱無しで探索魔術を発動させる。馬車を襲った連中が数人、東の森の方へ逃げていくのが見えた。やっぱ

り情報通り、盗賊どものアジトは東の森にあるみたいだ。
「わかりました。あいつら東の森へ逃げていきました！」
「お手柄～！じゃ早速乗り込んで叩きのめしに行きましょ！」
「ダメだよ。まだ相手の戦力がどれくらいか分からないじゃないか。」
「うっ・・・・・それは・・・・。」
その場で作戦会議を行い、今日は偵察をして襲撃は明日にすることに決まった。と、その時
「ッ！ハヤカ、危ない！！」
「ふぇ！？」
突然クロードさんが抱きついてきた！次の瞬間、どこからともなく飛んできた銃弾が馬車の壁に小さな穴を空ける！
「あぁ～、避けられた～！」
「いや上出来だ！一気に決める！」
近くの茂みから出てきた謎の二人の男女が襲いかかってきた！どうやら銃を撃ってきたのは後ろにいる小柄な女性だろう、もう一人の男性が腰から剣を抜き、ジャンプしてこちらに斬りかかってきた！
「くっ！！」
ガキンッッ！！
クロードさんが咄嗟に抜いた双剣でなんとか攻撃を防いぎ、謎の男性は再び後ろへ飛び、距離をとった。私たちも立ち上がり戦闘態勢へ！！
「エステル！」
「わかってる！ハヤカちゃん！」
「はい、イリス！」
「了解。出でよ、『外側の神（デウス・エクス・マキナ）』！！」
イリスの声と同時に虚空から一冊の本が現れる。それを掴み、剣をイメージし、剣のページの起動キーをなぞり出てきたインフェリアソードを構える！
「い、いきなり何すんのよ！危ないじゃない！」

「そうですよ、いきなり攻撃なんてヒドイです！」
「盗賊風情がギャーギャー騒ぐな。リ、おまえはあのちっこいのをやれ！俺は二刀流ともう一人の女をやる！」
「はぁーい、了解！！」
「え・・・・ちょっと待ってくれ！僕たちは」
「問答無用！！行くぜ！」
後ろのエリと呼ばれた女性が銃を構え、私とクロードさんたちの間に連射してくる！おかげで二手に分かれてしまい私はエリさんと一騎打ちになってしまった。どうしようか、対人戦なんて初めてだし相手を傷つけないで倒せるほど強くないし・・・・なって考えてる間に向こうはガンガン撃ってくる。
「っく！」
「ほらほら、ちゃんと避けないと痛いよー！」
「わ、私たちは盗賊なんかじゃない！」
「じゃあ証明してみてよ、私を倒してね！」
これじゃ埒が明かない。服に弾が当たっても平気だろうけど生身のところはきっとダメ、相手が銃使ってる以上近接戦は出来ない。困った・・・・・。仕方ない、下級魔術で対抗するか。
「翔べ！フレアアロー！」
「え？魔術！」
手のひらから放たれた炎の矢はまっすぐ進み、彼女の銃を弾き飛ばす。銃を弾き飛ばされた衝撃で地面に倒れたエリさんとの距離をつめインフェリアソードを向ける。
「マ、マジ・・・・・？」
「話を聞いて、お願い。」
「エリッッッ！！」
「うわっ！」
話をしようとしたら横からさっきの男性が剣を構えて突撃してくる。よく見ると構えた剣が刀であることが分かった。いくらこの服でも刀で切られたらバッサリ行くだろう、咄嗟のことだったので避ける

こともできなかった。
「ハヤカ！」
「ハヤカちゃん！」
目の前に刃が迫った時、目の前に見えない壁が展開され、迫りくる刃を防いだ。
「な、何！？」
「はぁ・・・全く貴女はどうしようもなくビビりね。」
「イリス、どうして？」
「貴女に死なれちゃこっちが困るのよ。刀の貴方、悪いけど勝手に盗賊扱いしないでくれる？」
「いや、その、ほんとに盗賊じゃないんだな？」
「どこをどう見たらこの恰好が盗賊に見えるの？貴方の目は節穴？」
「あー、・・・・・・・・・・・・済まなかった。」
「・・・・ごめんなさい・・・・・。」
なんなんだろこの人たちは・・・・・・・・・？

第5章／カン違いはケンカのもと（後書き）

どうでしたか？新キャラ登場です。この二人は疾花たちと一緒に旅することになる仲間なのでもっと詳しく描写していきたいです。余談ですがこの二人は物語を書き始める前から登場させる予定でしたw緊急！実は挿絵（疾花たちの顔）をキャラクター設定に乗せたいと考えています。もし、ヒマだからいっちょ書いてやっか。なんて親切な方がいらっしゃいましたら連絡ください！1月7日まで待っていますので連絡待ってまーす！！1

次回予告

ユーリとエリに盗賊とカン違いされた疾花たちだったがその誤解を解き、盗賊のアジトへ乗り込む。しかし、森には謎の結界が張ってあり出られなくなってしまう。脱出の方法を探すため奥に進むことに、そしてそこで疾花たちが目にしたものとは……！？

第６章／争いは何も産み出さない　（前書き）

ごめんなさい！！活動再開を発表したのに遅くなってしまいごめんなさい！！
なかなかいいアイディアが浮かばなく、ちょいグダグダになってしまいましたが　何とか書き終わりましたので、どうぞ！

第6章／争いは何も産み出さない

〜

？　〜

メルティッド大陸南部ガリア王国〜交易都市ペターニ間中原

謎の二人組に襲われた私たちだったがイリスのお陰でその誤解を解くことができた。それからお互いの事情を話し合うことに。すると、二人は旅人で東の大陸から来たそうだ。ただ、旅人とはよーするに私の世界でいうプー太郎やニートと同義語（私たちは別）らしい。が、当然旅には金がかかる。つまり必然的に日雇いの仕事をしなくてはいけなくないからこっちの世界の連中よりだいぶ、というかかなりまとも。（ただ定職に就かないだけらしい……）そんなわけで腕に自信がある二人は傭兵まがいなことをして稼いでいて、ちょうどこの盗賊退治をやっていたそうだ。それでバッタリってワケ……

「いやー、すまなかったな！この通りだ！」

「もういいよ、勘違いは誰にだってあるから。」

「で、でもあんな危険なことしちゃって……。」

「そんなことないですよ、私たちだって武器を向けたんですからお互い様です。」

「そう言ってもらえると嬉しいんだが……やっぱりなんか引っ掛かる、そうだ！あんたたちも盗賊退治してんだろ？」

「そうだけど、それが何よ？」

「だからそれを俺たちも手伝うよ！色々と情報も持ってるぜ。」

「本当！！なら大歓迎よ！いいよね、二人とも？」

承諾せざるを得ないでしょ……この人、かなり交渉上手だ、敵に回したくないな……

「わ、私は構いませんよ。クロードさんは？」

「まぁ戦力は多いほうがいいし、構わないよ。」

「よっしゃあ、なら決まりだ！おっと、そういや自己紹介がまだだったな、俺はユーリ・ナイトハル。こっちは……」

「エリ・ナカミネです。少しの間だけどヨロシクね？」

それから一度街に戻り昼食を食べてから用意を整え、東の森へ向う。その間にお互いのことを話し合った。二人は西の大陸出身でとある村で会ったらしい。しかもエリちゃんは私の一つ上だそうだ！なんか気軽に話せる相手ができてよかった。それでも私が一番年下か……。それから歩き続けて数時間後、やっと森に到着。時間もあまりなかったため、ほとんど休み無しで歩いてきたお陰で足はパンパン、戦う前からもうクタクタ。ただ周りを見ると疲れているのは私だけみたいだ。流石は騎士と旅人……

「ハヤカ、だいぶ疲れてるみたいだけど、大丈夫？」

「う、うん。大丈夫だよ。」

「おいおい、これからが本番なんだからしっかりしてくれよ？」

「わかってます、そんなにバカにしないで下さい！」

「ハハハ、そんなに怒るなよ。」

「ほら二人とも、遊んでないで！」

「「はーい……」」

外とは一転、森の中はまるで世界から隔絶された空間のようだった。外の季節は初夏だというのにここはひんやりと不気味に冷たく、あたかも森全体が私たちの侵入を拒んでいるようにさえ思えてきた。それに一番引っ掛かっているのは森という場所にいるのに生き物の気配が感じられないということだ。どうやらみんなもそのことに気づいたらしく、その場に立ち止まる。

「ねぇクロード、何かおかしくない？」

「やっぱりエステルもそう思う？僕の勘違いじゃなかったのか……」

「おい、どーすんだよ？一度引き返すか？」
「イヤよ！せっかくここまで来たのに帰るなんて！」
「じゃあまだ進むのか？どう考えてもおかしいだろ、この森！？」
「ふ、二人ともケンカしない！。ユーリもそんなに怒らないで……ハヤカはどう思う？」
「うーん、どうだろうね？イリス、わかる？」
「これはどうも森全体に封絶結界が張られているみたいね。」
「封絶結界だぁ～？なんだよそりゃ？」
「封絶結界とはその名の通り展開された空間をその世界から切り取る、特別な結界のことよ。でも今の世界ではもう術式は失われてるはずなのに……」
「それが今ここに展開されてるってワケか。」
「そういうこと。展開された以上術者本人が解除するか死亡するかしない限り外には出られないわ、進むしかないようね。」
「よーしそうとなったら早速前進～！行くわよみんな！」
そんなわけでどんどん森の奥へ進む。敵陣の真っ只中なのでいつ襲撃されても平気なように私もインフェリアソードを腰のベルトに差し込みいつでも戦えるように準備しておく。するとさらに奥からとある匂いがした。生臭く、そして鉄臭いあの液体の匂いだった。血だ……。
「これは……！」
「ヒ、ヒドイ！こんなの、これじゃまるで！」
虐殺だ。誰も口には出さなかったがみんなの考えは一致していただろう。そこには先に乗り込んだだろうペターニの騎士団とそこにいた盗賊たちの無惨な亡骸が無数に転がっていた。手足が無いもの、頭が無いもの、内臓が飛び出たもの、少なくとも五体満足のものを探すほうが大変なくらいだ。それを頭で理解した瞬間、とてつもない吐き気に襲われ、その場に蹲ってしまう。
「お、おい大丈夫か！？」
「ハヤカちゃん！」

なんとかお腹の中身を出すことは免れたがあまりの気持ち悪さに立つことができなかった。何なんだよ、これ……
「……もう大丈夫です、先を急ぎましょう。」
心配するエステルさんとクロードさんを説得しているとまた、さらに奥から声が聞こえてきたのだ。恐怖に怯えた男の声だ。
「襲われてる！みんな、行くよ！」
「りょ、了解！」
「仕方ねぇ。行くか！」
「はい！」
死体が転がる広場を抜け、声のほうへ走る。幾つかの茂みをかき分けて次の広場に出ると二人の男がいた。一人は大振りの血がこびりついた剣を持ってもう一人の男を追い詰めていた。見たところ二人とも盗賊のようだ。
「や、やめろやめてくれ！俺たち仲間だろ、な！？」
「……。」
「おい、聞いてるのか！？頼むから命だけは……！」
「……。」
追い詰められた男の言葉を無視して手にした剣をその男に向け振りかざす。
「や、や、やめろ！う、うわあぁぁぁぁ！！」
その言葉を最後に、男は絶命した。
「何てことを……！」
「テメェ、自分が何をしたのかわかってるんだろうな？」
「……。」
「おい、聞いてんのかよ！？あぁ？」
ユーリさんが刀を抜き払い、男に向ける。すると男はこちらに真っ直ぐ向き直り、剣を捨てた。
「みんな、気をつけて！あいつ人間じゃ無いわ！！」
「イリス、どういうことなの！？」
「しっかり前を見てなさい、……来るわよ！！」

次の瞬間、目の前の男が膨れ上がり破裂する。そして破裂したものがまとまり大きな四本の足がある何かになっていく。形がはっきりしてくるとそれがクリスタルで出来ていることが分かった。顔と思われるところには二つの赤いクリスタルが浮かび上がり、あたかも目のようになっていた。まとまったそれは獣ののように見えるのにそれからは一切の気配というものが感じ取れなかった、まるで無機物のように。

「な、何なのよあれ！あれじゃまるで・・・・・」

「・・・・・悪魔！」

「あの、悪魔って何なんですか？」

「悪魔っていうのは旧文明を滅ぼした生物兵器よ、全部壊したはずなのに！！」

「おいエステル、確かコイツ聖典に載ってたよな？」

「うん、よく知ってるね。あれは聖典に記されし七十二柱の一柱、沈黙のヴェルゼリア！」

「話は後だよ！まずはあれをなんとかしないと！」

クロードさんの言葉でみんなが悪魔に向き直る。私たちの殺気を感じ取ったのか、悪魔は背中に生える何本もの巨大なクリスタルを逆立てこっちめがけて飛ばしてきた！間一髪で飛びのき、みんななんとか回避するが咄嗟だったのでバラバラになってしまう。振り回される巨大な足を避けて懐に飛び込むが強靭なクリスタルの体に弾かれてしまい、ダメージが全く与えられない。詠唱したいのだが相手が立ち止まる隙を与えてくれないので大技発動出来ない。くっそー、神君廟で使ったあのヘンな眼は使えないしどーしよー！？すると突然攻撃がやむ。どうやら背中のクリスタルを撃ち尽くしたようだ。

「お前ら、一点を集中攻撃したらダメージ与えられるんじゃないか？」

「ナイスアイディア！それでいこ！」

「じゃあ私とエリちゃんの攻撃の後に突っ込んでください！！」

「「「了解！」」」

「いくよハヤカ！」
「うん。」
エリちゃんが弾倉に新しいマガジンを突っ込み、悪魔に向ける。私も手をかざし詠唱を始める。
「　光よ、勇者の名の元に！闇を切り裂き邪を滅する聖なる矢を！〈ライトニングエクスプロージョン〉！！」
同時に放たれた弾丸と光弾は一直線に進み、大きな悪魔の体を支えている太い足に直撃する。そして爆風がはれる前にクロードさん、ユーリさん、エステルさんの順に突っ込み私たちが攻撃したところに連続で打撃を与える。しかし、悪魔の足には無数のヒビが入ったものの破壊するには至っていなかった。
「チッ、これでもダメか。」
「打つ手無しってこと？」
「ねえ、イリス！なにかいい方法無いの！？」
「貴女の眼がつかえれば問題なく勝てるわ！どうして使えないの！？」
「わっかんないよー！！私の眼を使う以外にアイツを倒す方法は無いわけー！？」
「体のどこかにアレ形成してる晶核っていう物質があるはずだから！それを破壊すれば倒せるはずよ！」
「了解！みんな、聞こえた？」
「バッチリ！！」
「問題ねぇ！」
「ＯＫです！」
飛び交うクリスタルの散弾の間をくぐり抜けながら悪魔の晶核を探す。しかしあのデカイ体の中から手のひら大の結晶を探しだすのは骨が折れるだろうなー、なにかもっと効率のいい方法が無いのか？
そんなとき、一本の足がユーリさんを捉えた！
「ユーリさん！！」
「大丈夫だ！今のうちだ、早く探せ！！」

どうやらスキを作るためにわざわざ攻撃を受けたらしい。なんとまー危険なことを……。だがそのお陰で懐に飛び込むことが出来た。そこで悪魔の体の中心あたりで赤い輝きを放つ握り拳大の宝石を見つける。これが晶核か、まさに心臓ってカンジだな・・・・って見つけたのはいいけど、どうやって破壊すればいいの!?体の中にあったら攻撃が通らないじゃん!

「ねえ!見つけたのはいいけどどうやって壊せばいいの!?」

「ナイフを使いなさい、あれは普通の武器じゃないから!」

言われたとおり上着の内ポケットから古びたナイフを取り出し、晶核のあるあたりに思い切り突き刺す。今までどんな攻撃も弾いてきたクリスタルの体がたった一度、ナイフで突いただけであっけなくその攻撃を通した。しかしナイフの刃が短く、晶核にまでは届いていなかった。

「ナイフに向けて魔術を放ちなさい!」

「え?う、うん!!」

ナイフを手放し、ほぼ零距離でライトニングエクスプロージョンを発動!ナイフに当たったライトニングエクスプロージョンはナイフの金属部分に吸い込まれていき、悪魔の体の中で再度発動されて晶核を破壊した!

「うわ、うわわわわ!!」

のたうち始めた悪魔の懐から何とか逃げ出し皆さんと合流して、そのまま成り行きを見守った。しばらくするとバタバタ動き回っていた悪魔はおとなしくなり、光の粒になり消えていった。直後、森全体を覆っていたイヤな感じは消え、生き物の気配が戻ってきた。

「終わったのか……?」

「みたい、だね。……正直危なかった　……」

「ていうかユーリ、あんた何て危ないことしてんのよ!一歩間違えたらあの世行きだったのよ!?」

「ギャーギャー騒ぐなよ、結局ケガしなかったんだかそれでいいじゃんか。」

「ダメですよ、いくらスキを作るためだからってわざわざ攻撃を受けるなんて……」
「そうだよユーリがケガしたら治すの私なんだからね！」
ともあれこれで盗賊事件もこれで解決できたしあのオッサン達との賭けも勝った。街に戻り王都から応援を呼んで亡くなったペターニの騎士たちをようやく弔うことができた。それから偶然街であのオッサン達に会い、事件の真相と解決を知らせたら尻尾を巻いて逃げていった。たった四人で伝説級の化物である悪魔を倒すしちゃうんだから……逃げるよね、そりゃ。そういえばあのナイフはライトニングエクスプロージョンの直撃を受け、消えてしまったみたい。イリス曰く「ライトニングエクスプロージョンの威力に耐えきれなかった」そうだ。その後また明日会うことを約束してユーリさんたちと別れ、宿に戻った。

午前7時、私たちは宿を出て西の門へ向かった。街はまだ寝静まっており朝の空気がひんやりと体を包みこむ。門のところには二人の人影、ユーリさんとエリちゃんだ。
「おはようございます、お二人ともお早いですね。」
「おはよう、話って一体何なんだい？」
「やっほー二人とも！」
「おう、おはよう。それで話ってのはな……ああ、そういやあんたらどこへ行くんだ？　」
「今は西の大陸を目指してるんだ。二人は？」
「わぁお！奇遇ですね、私たちもゼピルムに行く途中だったんですよ。」
「なーんだ、そういうことなら話は早い。なぁあんたら、ひとつ提案なんだが……一緒に行かねぇか？ここで会ったのも何かの縁だと思うんだが……どうだ？」
「うーん、そうだな。二人はいいかい？」

「私は構いませんよ？仲間が増えれば心強いですから。」
「ま、いいんじゃないの？」
「そうか！なら、今日からゼピルムまでよろしくな！」
「ヨロシクお願いしまーす！」
こうして私たちは三人から五人になり、また旅路に着くのだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｅｄ……

第6章／争いは何も産み出さない　（後書き）

はい、相変わらず戦闘シーンがヘタですね。自分でわかっているのにどうしても書きたくなってしまいます。まあこの物語はあんまり重い展開にしたくないので次回から戦闘は自重ぎみいきたいと思います！

さて、次回は戦闘などは一切無しにしてほのぼの行きますので今後もまたよろしくお願いします！

次回予告

道中ちょっとした事件に巻き込まれながらも無事、ガリア王国に着いた疾花たち。しかし大切な飛空艇のチケットをなくしてしまい大慌て！必死に探し、見つけた意外な犯人とは！？

第7章／困った時は相談することが重要だと最近気付いた（前書き）

お久しぶりです。アイディアがなかなか浮かばず約一カ月近く投稿できませんでした。お気に入り登録していただいた方々には最大の謝辞を、そしてこの小説を楽しみしていた方々にもごめんなさい！

それではどうぞ！

第7章／困った時は相談することが重要だと最近気付いた

〜?〜
メルティッド大陸西部ガリア王国商店街

ここはゼピルム大陸に渡るための唯一の手段である飛空艇の港がある街、ガリアン。そして今私は途方に暮れていた、なぜ？それは少し時間を遡らなくてはいけない……

数時間前……

私たちはガリアンに入ってから飛空艇のチケットを取りにガリアン中央駅（セントラルステーション）へと向かった。この国は農業と機械技術がメルティッド大陸の中で一番進んでいる国だ。現代世界よりは遅れているけどこの大陸で一番というだけあって機械技術だけで走る列車があり、金属で出来たビルのような高い建物まであった。ただ街を歩いている人たちの服装がファンタジー過ぎてなんかズレているような気がしたけど……まぁ、そこは何も言わないでおこう。

「あいっかわらずハデな街だな、ガリアンってところはさ。」
「そうだねぇ〜、そういえばこの間来たときもうちょっと人が少なかったよね？」
「バカ、あれは平日だったからだよ。」
「二人ともここに来たことあるんですか？」
「ああ、俺たち東から来たからな。」
「え？じゃあ二人は東の大陸出身なのかい？」
「いいえ、私たちはゼピルム出身です。」
「じゃあ二人は里帰りってこと？」
それから他愛もない会話をしながらガリアン中央駅（セントラルステーション）の飛空艇係へと入っていく。しかしそこには予想もしない長蛇の列が出来ていた。

みんな待つのが嫌だったので仕方なくジャンケン（こっちにもあるんだ……）をやって負けたクロードさんがしぶしぶ残り、勝った私たちはクロードさんとの集合場所を決めて街へ繰り出した。途中で私とエリちゃん、ユーリさんとエステルさんの二組に分かれて行動することに。私たちはまず街の南側にある商店街へ向かった。そこは各地から輸入された商品が並び、この間立ち寄ったペターニの市場とは賑わい方が大違いだった。きっと渋谷ってこんな感じなんだろうな～。隣をみるとエリちゃんもその人の多さに圧倒されたみたいだったが気を取り直して歩き出す。それから露店に並べられた珍しいものに私たちは目を奪われっぱなしだった。色鮮やかな見たことのない花、おもしろい格好をした置物、かわいいウサギみたいな動物、ｅｔｃ・・・・・・などなどいつまでも私たちの興奮はいつまでも冷めることはなかった。こんなこと、久しぶりだな。年の近い子と一緒に遊ぶのなんて。そんなとき、不意に私のお腹が鳴る。そういやそんな時間か。

「ねえエリちゃん、お腹空かない？」

「ん？そうだね～言われてみると空いたかな。」

「じゃあさ、何か食べにいこう。」

「うん、いいよ。なに食べようか？」

私たちは商店街の一角にある食べ物を中心に販売しているところへ向かった。そこはお昼時のせいか中心部よりにぎわっていた。おかげでテーブルに座るのがどれだけ大変だったか・・・・・・。ウェイトレスさんが持ってきてくれたメニューを開き、気になったゲバッケンインゼクトというのを注文する。値段は手頃で量もあると言っていたのでとりあえず。エリちゃんは焼いた鶏肉をパンに挟んだもの（要するにサンドウィッチ）を注文した。料理がくるまで二人で雑談しているとエリちゃんがさらっと恐ろしいことを口にした。

「そういえばこのへんの地域って虫を食べる習慣があるらしいよ。」

「ええぇ～！嘘、ほんとに！？」

「うん、しかもバッタだって、考えられないよね。」

「い、いやそういえば私の世界でもイナゴっていうちいさなバッタ食べてたっけ・・・」
「え！じゃあハヤカも・・・・」
「いや、私は気持ち悪かったから食べたことないんだけど。」
話しているうちに料理が届いた。その、私が頼んだの、妙にデカくない？まるでコース料理のメインディッシュのみたいな蓋がかぶってるし・・・・考えを巡らせているうちに謎の料理は目の前に置かれ、その姿を露わにした。
「「きゃあああああぁぁぁぁぁ！！！！」」
でてきたのはなんと人間の頭ほどある巨大なバッタだった！！でかいうえに足はくっついてるし羽もくっついてるし、ああもう気持ち悪いいいいい！！そのままイスから転げ落ち、涙目になりながらエリちゃんと抱き合ってウェイトレスさんに質問責めを食らわす。
「な、ななななんなんですか！これ！？」
「何って、ゲバッセンインゼクトですけど？」
「ババババ、バッタだなんて聞いてないです！！先に説明してください！！」
「も、申し訳ありません！すぐにとりかえます！」
「じゃあ、彼女と同じ物を・・・・。」
その後ウェイトレスさんから聞いたのだがゲバッセンインセクトとはこちらの方言で「焼いた虫」という意味だったらしい。結局あの騒動で二人とも食欲が失せてしまったが注文した以上食べる事に。
（あはははは！まさか貴女、あんなもの食べるつもりだったの！）
いきなりイリスが頭の中に話しかけてきた。珍しいな、いつもなら日常会話に参加しないのに、つーか笑うな。
（うっさいなぁ、知らなかったんだからしょうがないじゃん。）
（聞けばよかったのに。）
（うぅ、だからほじくり返すな！てゆうか珍しいね、日常会話に参加するなんて。）
（最近出番めっきり少ないから。このへんで登場しておかないと忘

れ去られそうで。）
あ、そーですか、ご愁傷様です。そういや最初と戦闘の時くらいしかでてなかったっけ。なんか不憫だな。
（ほら早く食べおわしなさい。エリはもう終わっちゃうわよ？）
そういわれて止まっていた手を動かし残ったパンを口の中へ押し込み、水で一気に飲み込む。食事を終え、再度町へ繰り出した私たちはさっき見た雑貨屋へむかった。その途中でイリス（ミニサイズ）も話の輪に入っていろいろと服やバック、アクセサリーなどを選んだ。やっぱりイリスも女性なので相談にのってくれるのがうれしかった。それから時間めいっぱいまでその店で過ごし、私はかわいい肩掛けカバン、エリちゃんはペンダントとリボンをいくつか買い、集合場所の広場に向かった。
そこには広場の真ん中に置かれた噴水にぽつんと寂しそうに座っている男性が一人、クロードさんだ・・・・なんかかわいそう。近寄りがたい雰囲気を醸し出していたが声をかけないわけにもいかないので近くへいく。
「クロードさん、クロードさん。」
「ん？ああ、ハヤカとエリか。もう時間かい？」
「うん、そろそろユーリたちも戻ってくるんじゃない？」
「そっか、じゃあ一足先にチケット渡しとくね。」
クロードさんが二枚の紙をさしだす。それを受け取りよく見るとそこには【8番ドック　19時発】と書いてあった。つまり今日の夜7時、8番ドックから出発って意味か。出発は夜、だいぶ時間あるな。そういえばまだ二人ともきてない、何やってるんだろ？そのとき、噴水の向こう側から聞きなれた声が聞こえてきた。
「あー買った買った、大量だ！」
「いや、流石に買いすぎでしょそれは？」
両手いっぱいに大きな袋を抱えたエステルさんとユーリさんがやってくる。袋の口からは大量の林檎がのぞいていた・・・・って二人ともどんだけ買ってるんですか！？絶対二人じゃ食べきれない量だ

よね！驚いている私を後目に二人はみんなに林檎を配り始めた。
「どれだけ買ってるんだよ、二人とも」
「いや実はさ、ちょうど店の前を通りかかったら安売りしててさ、つい！ね、ユーリ？」
「ああそうだ！ちょうど安売りしててな！」
「なんか、二人とも妙に意気投合してない？」
「エ、エリちゃんもそう思う？」
「こりゃー何かあったわね。」
「あ、イリスさんもそう思いますか？」
「ええ、あの様子じゃねぇー。」
それから二人にもらった林檎と飛空挺のチケットをバックの中に入れて暇つぶしの為、近くの喫茶店へと向かった。雑談を始めて1時間ほどたったとき、もらった林檎を食べようと私は足下のバックへ手を伸ばし、異変に気付く。
「あ、あれ？バックがない・・・・？」
「どうしたんだよハヤカ、そんな焦った顔して？」
「バ、バックがないんです！さっきまでここに置いてあったのに！」
「バックってさっき買ったヤツだよね？」
「うん。」
「ここ以外で下ろしてないなら、盗まれたって可能性が大きいかな。」
「えええ～！そんなー！！」
「マヌケね、貴女。」
「いや、私のせいじゃないよね！？」
「ねぇハヤカちゃん、もしかしてアレ？」
エステルさんが指さす方を見ると、そこには私の肩掛けカバンをくわえて路地に入っていく猫がいた。こうしてられない、早く捕まえないと！すぐに席を立って、猫を追いかけるが猫もそれに気づき走り出す。それから十数分、街の中で追いかけっこをするが結局逃げられてしまった上にみんなとはぐれてしまい、現在に至るってわけ。

〜?〜
メルティッド大陸西部ガリア王国商店街

何のアテもなくトボトボ歩いているうちに日は傾き、だんだん暗くなってきた。時間は5時半、あと少しで飛空挺は出発してしまう。チケットもバックの中に入っているのであの猫を見つけないことには飛空挺に乗れない。なんで無駄に突っ走っちゃったんだろうな、私・・・・・。後悔先にたたず、考えても仕方ない。ま、何事も一人で抱え込まずだれかに相談するべきだよね？
（ねぇ、イリス。何かあの猫を簡単に探す魔術とかないの？）
（う〜ん、“探索”は対象物に触れてないといけないし・・・・・ちょっと待ってなさい、今探すから。）
そういってイリスは引っ込んでしまった。仕方なく私は引き続き自分の足で探すことに。それから1時間ほどして再度イリスがでてきた。
（疾花、見つかったわ。“感知”よ。）
（“感知”？）
（ええそうよ、“感知”は術式発動者を中心に半径５００ｍ、イメージした物体のおおまかな位置を知ることができる魔術よ。ま、かなり大雑把な位置しかわからないからあんまりアテにはならないけど、無いよりはマシね。あ、あと移動しながらは使えないから注意なさいよ。）
（おお、でかした！ではさっそく使ってみますか。）
道の真ん中で詠唱するのは恥ずかしいので人気の少ない路地に入り、あの猫をイメージしながら詠唱を始める。
「我を取り巻きし魔の光よ、我が望みしものを示せ。」
私の周りに光の輪が出来上がり、詠唱が終わると同時に輪が弾け広がっていく。すると頭の中に街の風景が流れ込んできた。しばらく探してみたけど、このあたりにはいないようだ。術を中断し、違う

ポイントに移動する。それから三カ所ほど回ったところで猫を見つけた！タイムリミットはあと３０分、早く捕まえないと！大急ぎで猫のいた店の裏へ走る。しかし、そこについた時には移動してしまったみたいでいなかった。仕方なく“追跡”の魔術を使用して猫の後を追う。そしてそれから数十分、昼間と同じような追いかけっこの末にやっと捕まえることができた！！

「は、はぁはぁ、やっっっっっと捕まえた！観念しろバカ猫！」

「疾花、あんまり時間ないわよ。はやくしないと！」

「そうだね！もうやるなよ、猫。」

本当だったらもっと怒りたかったけど時間がないので省略。街の中にある時計はすでに６時５５分を指している。ヤバイ、かなりヤバイな、このままじゃおいて行かれる！疲れた体に鞭打って港に向かって全力疾走、うれしいことにここから港はそんなに離れていないようだ。ってそんなこと考えてる場合じゃない！とにかく走らなくちゃ！！

〜?〜

メルティッド大陸西部ガリア王国飛空挺港

どれだけ走ったかわからない。やっと港が見えてきた。乗り込み口のような建物に駆け込むと「まもなく８番ドックからゼピルム大陸行きの飛空挺が出発いたします。ご搭乗のお客様は搭乗口へお急ぎください。」とアナウンスが流れた。なにも考えずに８とかかれたプレートが下がるゲートへ走る。通路の人をかき分け、改札口のような場所へ。そこでチケットを見せて奥のハンガーに走る、いやもう足はフラフラで走っていないのと変わらない速度だ。飛空挺の搭乗口が見えてきた、そこには四人の人影。みんなだ！こっちになにかを叫んでるみたいだが耳に入ってこなかった。その期待に答えるため、残った力を振り絞り、搭乗口に滑り込む。

「はぁはぁはぁ、つ、疲れた・・・・こんなに走ったのは生まれて

初めてかも・・・・・。」
「よかったハヤカ！間に合ったんだね！」
「ったく、ドジだな。次は気をつけろよ、置いて行っちまうぞ？」
「もう、心配したんだからね！」
「ゴ、ゴメンなさいみんな。」
「ねぇねぇハヤカ、この猫は？」
エリちゃんの声に後ろを向くと、私のバックを盗んだ猫が平然とこちらを向いて「にゃーん」と一鳴きした。
「な、なんでお前ここにいるんだ！？」
「にゃーん。」
「もしかしてハヤカちゃん、懐かれちゃった？」
「ええ！」
「いいじゃねぇか、猫なんだし。」
「でもぉー！」
「もう扉閉まっちゃったから追い出せないよ、どうするのハヤカ？」
「うううぅ、ゼピルムまでだからね！」
私は猫を持ち上げ、目を見ながらそう言う。それでも全く動じずに「にゃーん」と鳴いただけだった。結構声色低くして言ったはずなのになぁ、私ってそんなにナメられてる？
「それじゃあ名前決めないと！私、ミケがいい！」
「いや三毛猫じゃねぇだろ。そうだな、三郎ってのはどうだ？」
「オスかどうかわからないでしょーが、マリーは？」
「エステル、言ってることズレてるよ。ハヤカは何かある？」
「え～っと、何でしょう？」
それから長い間話し合い、結果私が出した「みーこ」に決まった。
そして船はゼピルム大陸を目指し、飛び立つのだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｅｄ……

第7章／困った時は相談することが重要だと最近気付いた（後書き）

今回は戦闘抜きでほのぼの楽しく書いたつもりなのですが、どうでしたか？次回も今回と同じカンジにほのぼの行きたいと思っています。なるべく早く投稿しますので温かく見守っていただければ幸いです。

次回予告

ゼピルム共和国に到着した疾花一行。聖魔王との謁見を申請するも肝心の聖魔王が不在で次の日になってしまう。そのため一日自由行動をすることに。そして街で疾花は不思議な少女と友達となる、しかし彼女には誰にも言えない秘密があった……

第８章／初心に戻るのって目的を明確にするための手段の一つだと思う（前書き

大変申し訳ありませんでした！締め切り破りのｅｉｆｏｓです。
やっとこさ書き上りました、いやー長かった……。なんと前回の投稿から約二カ月もたってたのが自分でもびっくりです。
長い時間かけましたが中身が伴っているかどうかが不安です、それではどうぞ～

第８章／初心に戻るのって目的を明確にするための手段の一つだと思う

〜?〜

ゼピルム大陸中央部ゼピルム共和国首都パルテナ

　ゼピルム共和国、旧文明崩壊後一番最初に成り立った国家であり、唯一“魔人”が暮らしている国。それ故今でも能力より魔力を重視した政策がなされているそうだ。そして最大の特徴はこの国を束ねる王、【聖魔王】の存在だろう。今のご時勢では珍しい世襲制で（ちなみに大半の国が選挙制らしい）代々紅鸞家の者が聖魔王を勤め、国を導いてきたそうだ。さて、説明はこの辺にしておいてと、今私たちはゼピルム共和国の首都パルテナにいる。ここはまさしくファンタジーな街で周りにはレンガづくりの家、道の真ん中を堂々と馬車が闊歩している、そんな街だった。国民の半数が魔人という私たちとは違う人種らしいが見た目はほとんど変わらないそうだ。

「そういやお前らってゼピルムに何しにきたんだ？初めて会ったときは世界がどうとかって言ってたよな？」

「はい、今この世界はその、何というか世界を管理するプログラム、っていってもわからないか。ええと、とにかくそういった世界を管理するものが壊れたまま動いてるせいで不具合がいろいろあって・・・・」

「貴女が説明しても何いってるのかさっぱりよ、私が代わりに説明するわ。彼女がいったことは間違って無いけどみんなわからないわよね？」

『うん』

そんなに説明力ないか、私？まあとにかく私では荷が重いのでイリスに全部丸投げ。説明が終わるまでヒマなので通りを歩く人を数えてみる（我ながら子供っぽい・・・・）。ちょうど１２０を越えた

とき、後ろが騒がしいことに気づく。
「アホ！！そんな重要なことはもっと早く言えよ！？」
「あのね、私は聞かれないことまで説明できるほど気が利く女じゃないのよ！それくらい察しなさいこの長髪女顔！！」
「なっ・・・・・・・・・！！い、言ったなエセ妖精！！」
「失礼ね！誰がエセよ、だ・れ・が！」
「何やってるんですか二人とも！？」
それからなんとかして二人をなだめ、最初の目的である聖魔王へ会うために私たちはゼピルム城へ足を運んだ。その途中もユーリさんとイリスはそっぽを向いたままだった。何というかこの二人、どうも相性が悪いみたいなんだな～、最初に会ったときも牽制しあってたっぽいし・・・・・・う～ん、何でだろう？そんなことわかるわけもなく考えるのをやめることに。ふと目に入る町並み、今までに立ち寄った町の中では一番のにぎわいかもしれない、通りを歩く人々は笑顔で、この世界に終わりが近づいてることなんて知らずにみんな楽しそうに日々を過ごしている。そう思った瞬間、私の頭にある疑問がよぎった。私たちの旅って本当に意味があるの？
（あるに決まってるでしょ、今までみてきたこと信じられないの？）
（イ、イリス・・・・・・でも、今ここに生きてる人はこの世界が終焉に向かってるなんて、わかってないじゃん！そんなの・・・・！）
（現実から目をそらさないで、貴女も見てきたでしょ？あるはずのないオベリスク、絶滅したはずの悪魔の出現、そして何より消滅の白壁、貴女たちがヴァルハラの境界って呼んでる霧の壁・・・・・これは昔この世界が滅んだ時に起きた現象と一致するの。一度目は救えなかった、でも今は貴女やクロードたちがいる。私はもう二度と世界をリセットなんかしたくない！だから、私というシステムからこの壊れかけた世界を解き放ってほしいの！）
（っ・・・・・・！）
何も言えなかった、彼女がそんな思いで私を呼んだなんて、今まで

思っても見なかった。昔読んだ本に書いてあった、人間は誰しも生きる理由、生まれてきた意味がある、って。じゃあイリスは私に殺されることが生まれてきた意味だっていうの？そんなの悲しすぎる・・・・・・。

（ねえイリス、最初に会ったときいってたよね、私の願い叶えてくれるって）

（ええ、言ったわ。まさか、私に死なないでなんていうわけないわよね？）

（・・・・・・）

お見通しってわけか、でも諦める気はさらさら無い。なんとしてでもみんながみんな、笑って過ごせる、そんな世界を取り戻す。もちろんみんなイリスも生きて。

（以外と頑固ね、貴女）

（当然。もう誰かが涙を流すのなんて見たくないから）

そうだ、私は今まで多くの人の涙を見た。私の病気のせいで大勢の人が悲しんだ。父さん、母さん、友達、みんなみんな私が悲しませた。だからせめて最後くらい喜ばせてあげたい、せめて死ぬ前に一回くらいは・・・・。・・・・やべっ、なんかすごく重い話になっちゃった、ニガテなんだよね～こういう話。あ、いや、得意って人もあんまりいないだろうけど。私の意識が現実（？）に戻ってきたとき、目の前に大きな白い城壁が広がっていた。

～　？　～

「ど、どうしてですか！？聖魔王様と面会ができないなんて！」

「だから何度も申しておるだろ、現在聖魔王様はご不在だ。いつ戻られるかはわからん、また後日参られよ」

「そ、そんな・・・・」

ゼピルム城城門前、私たちは見事に足止めを食らってしまった。門のところにたっている強面の衛兵さんに話を聞いてみるとどうやら

今、どこかにいっておりここにはいないみたいだ。聖魔王に会いに来たというのにその本人がいないのであれば話にならない、なんでこんなにタイミングが悪いのかな？
「さて、これからどうする？少なくとも1日はヒマになっちゃったけど」
「なら先に俺らは用事片づけちまうけど、いいか？」
「うん、問題ないでしょ。みんなもいいよね？」
そっか、ユーリさんとエリちゃんは元々私たちの旅よりそっちがメインだったもんね。そんなわけで私たちはその日、各自自由行動で一日を過ごすこととなった。エステルさんはクロードさんを誘ってどこかへ行ってしまったため私は一人で行動する事に。このあたりのことはわからないのでイリスの案内でこの近くで一番賑わっているところへ足を運んだ。ここの街は今までに立ち寄った街とはまたひと味違った雰囲気を漂わせていた。賑やかと言うよりは騒がしいといった方が当てはまるような喧騒、もの凄く失礼だが今までの街よりも野蛮な感じがする。いろいろと聞きたいこともあるんだけどイリスは「久しぶりに長くしゃべって疲れた」っていって眠ってしまったので後回し。それから一人で歩き回っていると、あることに気づく。この街にはまるで奴隷のような扱いを受けている人がいる、それどころかその辺で人間の売り買い、つまり人身売買が行われていた、しかも全うとは言えないような値段で。
（そういえばイリスが言ってたっけ、この国は唯一魔人と奴隷っていう存在がある国だって。奴隷、か・・・・・）
この世界では一昔前までどこの国でも奴隷がいたらしいが今では人権がとうだとかでここ、ゼピルム以外の国では奴隷の労働・売買を禁止しているそうだ。それらを眺めながら街の奥へ歩みを進めていく、奥へ進むにつれ鼻腔を突く嫌な臭いが強くなり、さっきとはまるで違う熱気が漂っていた。頭の中では「これ以上は行かない方がいい、すぐに戻れ」と警告しているのに体はまだまだ進もうとしている。最近、というよりこっちの世界にきてから自分のことを押さ

えられない、向こうの世界ではずっとベッドの上で寝たきりで外の世界を知らなかった、それを今この世界で体験している。そのためか自制心を越える好奇心が湧いてくるんだろう。狭くなった通路を抜け、そこで目にしたもの、それはまさに人の見本市だった。道の端に並べられた檻に入れられた人、人、人、それを売る奴隷商人。衝撃だった、むこうの世界でだってどんなにひどくてもこんなことは無かった。しかし目の前にはそれが広がっている、もうダメだ、いくら何でもこれは耐えられない。戻ろうと後ろを振り向いた瞬間、何かにぶつかった、たぶん人間。いったーい！！どこに目つけてんだよ！？（ヤクザか・・・）

「いっつつ、ゴメンなさい。痛いところありませんか？」

「あ、はい大丈夫です」

と言いつつ石畳におもいっきりぶつけたお尻はまだズキズキ鈍い痛みを放っていたけど。どうやらぶつかったのは彼女のようだ。赤みがかった長い髪を頭の後ろで縛ったいわゆるポニーテールにし、丸メガネをかけたおとなしそうな私とそんなに変わらなさそうな女の子だった。

「よかった～、どこもケガしてなくって！あ、その私、急いでるのでこれで失礼します」

「え、あ、はい」

そういって女の子が立ち去ろうとした瞬間、背後から野太い叫び声が聞こえ、数人の大柄な男が息を切らして走ってきた。どうやら彼女を追いかけてきたようだ。

「オイコラ、待てこのクソガキ！」

「あちゃー、追いつかれちゃったか・・・・・・」

「もう逃がさねぇぞ、観念しろ～、ヒヒヒヒ！」

とりあえず耳打ちで女の子に話しかけてみる。

（え～っと、ねえあなた、何したの？）

（何したと言うよりもあの人たちは人さらいみたいな連中ですね）

（つまりどういうこと？）

（違法奴隷商人ってやつですよ）
それを聞いた瞬間、一気に頭に血が上った。まさかこんな方法で奴隷を作るなんて、サイテーだ、それ以前に奴隷なんて存在があること事態サイテーだ。そんなわけで私はデウス・エクス・マキナを手の中に召喚して一歩前に踏み出す。
「ちょっとここで待ってて。私が蹴散らす」
「は？あ、あのちょっと！？」
デウス・エクス・マキナを開き、一番殺傷能力が低い魔術を探しはじめる。そしてページが半分を超えたあたりで止まり、その魔術を示す。ライトニングボルトか、脅しには丁度いいや。
「今すぐ立ち去ってください。そうすれば命は保証します」
「あ！？テメェ自分が言ってることわかってんか？」
「わかってますよ、早く行かないと痛い目にあいますよ？」
「どうやってやるっていうんだ～？オレたちの言うこと聞かないとそっちこそ痛い目みるぞ～、ヒャハハハハ！」
そういって狂ったように高笑いしている男が懐から鈍い光を放つナイフを取り出した。どうやら言ってもわからないらしいので実力行使。最初の一文をなぞり、手を男たちにかざすと手のひらに拳大の光の玉ができあがるり、その次の瞬間ーーーーー

バチン！！

と言う大きな音とともに雷光が迸り、ナイフを持った男の体を打つ。男は3メートルほど吹っ飛び、動かなくなった。ちょっとやりすぎたかな～？あ、大丈夫そう、ピクッって動いた。それを見てほかの男たちはすこし後ろへ下がる。
「もう一度言いますよ、今すぐ立ち去ってください！」
「ク、クソ！！覚えてろ！」
B級映画の悪役のような捨てゼリフを残し、男たちは気絶した仲間を抱えてどこかへ去っていった。

～?～

騒動の後、私たちは奴隷市場を後にし、中心街の小さな飲食店へ場所を移していた。彼女の名前は凜・クラウスというらしい。年は私と同い年で遠くの村から出稼ぎにきているそうだ。

「え～っと、改めて助けていただいてありがとうございました、何かお礼しますね」

「いいっていいって、私もああいう連中だいっキライだからさ。というか同い年なんだか敬語やめない？」

「う～～ん・・・・・そうだね、ふつうに話そ。あ、すいませ～んコーヒー二つくださ～い！」

「あ！だからお礼とかいいって」

「ダーメ、恩は必ず返しなさいってお母さんに教わったんだから」

何というか以外と頑固な性格だな・・・・・それからお互いのことをはなし、徐々に打ち解けていった（気がする）。とりあえず旅の目的は正直に言えるわけがないので「知人の人と一緒に旅をしている」ってことにした。ちなみに魔術のこともその知人に教えてもらったことに。

「へぇ～！疾花はハウリから来たんだ、すごいね！飛空艇にも乗ったんだよね！？」

「うん、乗ったよ」

「どうだったどうだった！？」

「よくわからなかったな、すぐに着いちゃったから」

「そうなんだ、残念」

そういって凜は肩をすくめる。う～ん、かわいいな、私なんかとは大違いだ。それから日が傾くまで私たちは遊び回った、それこそ友達のように。

「だいぶ暗くなってきたね、そういえば凜はお仕事大丈夫なの？」

「え！あ、ああその、きょ、今日はお休みなの、そうお休み！」

「そ、そうなんだ」
なんか今ちょっと狼狽えたようにも見えたけど・・・・・・まあいいか。
「疾花こそ、こんな時間まで大丈夫なの？」
「うん。集合場所決まってるからさ」
「そっか」
そんな話をしていたら遠くから凜の名前を呼ぶ男の人の声が聞こえた。ん？誰だろう？
「やっと見つけた。凜、お前勝手にいなくなるな！心配しただろ」
「ああ、ゴメンね。そうだ！疾花、紹介するね、この人は仕事先の先輩で私が下宿してる家の人で太刀ば・・・じゃない華斑　海さんだよ」
「初めまして華斑　海だ。よろしくな」
「風見　疾花です！よろしくお願いします」
「今日はありがとな、凜と遊んでくれて。職場には凜と年の近い奴がいないからな」
「な、なに言ってるの！ほら、は、早く帰るよ！じゃあね疾花！」
「そういうわけだ、それじゃあまた明日」
「はい！また明日！・・・・・・ん？また明日ってどういうこ・・・あれ？」
考えごとのためほんの少しの間、目をそらした短時間、明日の意味を聞こうと元の視線の戻したらそこに二人の姿は無かった。まるで最初から誰もいなかったように。まさか幽霊？・・・・・・いや、そんなはずはない。凜と一緒に買って交換したブレスレットはしっかりと手首にある。一体どこに消えたんだろう？日が沈みかけていたので宿屋に戻ることにした。みんなにも心配かけるわけにはいかないからね。
「ふわぁぁぁ～、あーよく寝た」
「あ、おはよイリス。っておはよって時間でもないか」
「疾花、あいさつに大事なのは時間帯じゃなくてその意味だからね。

ところでここはどこ？」
それから歩きながら私はイリスに今日あった出来事を話した。奴隷市場へいったこと、凛と友達になったこと、そのほかいろいろな思い出を。でも今は知る由もなかった、この思い出がこの世界で最後の楽しい思い出になってしまうことを・・・・・・・・・・・・。

さて、終わりましたがどうでしたか？楽しんでいただけたのなら幸いです。
次回の投稿は六月までには書き上げたいと考えています。

次回予告

一日を無駄に過ごしてしまった疾花たち一行は次の日、聖魔王との面会を果たすことになるのだったがその人物はなんと意外な人物だった。
そしてついに引かれる世界終焉の引き金、ハウリの聖殿に集う七本の剣、新たに始まる世界創造、この言葉が意味することは……？

第９章／会議！（前書き）

えー、最近言い訳ばかりうまくなってしまったｅｉｆｏｓです。

いえのＰＣが逝ってしまい、現在学校の授業中を利用してＵＰしています。

これは後の１０章とあわせての前後編になっていますので。

長らくお待たせいたしまして申し訳ありませんでした。それではどうぞ。

第9章／会議！

〜？〜

ゼピルム大陸中央部ゼピルム共和国ゼピルム城

目の前に白い壁が向こうまでずっっっっと続いている。今私たちは聖魔王様にあうためにゼピルム城へ来ていた。昨日はどこかに出かけていたらしく会うことができなかったけど今日は大丈夫かな？ちなみにユーリさんたちは用事が終わらなかったらしく一度それを伝えに帰ってきたらまたどこかへ行ってしまったので三人で会いに行くことに。話の内容は後で大まかに教えてくれればいいって言ってたから。城門のところまで行くと昨日いた強面の衛兵さんがいた。

「おや、昨日の旅人ではないか。よい知らせだぞ、聖魔王様がお帰りになった」

「本当ですか！それじゃあすぐに・・・・・・・」

「その前に、何用で聖魔王様にお会いになりたいのだ？理由を申せ」

「それは〜・・・・・・・・」

言えるわけ無いよねクロードさん、「私たちは勇者で世界を救うため、聖魔王様に会わなくちゃいけない」なんて。というか言っても信じてもらえないよ。どうしようかな？

「何だ、怪しいな。言えないような理由だというのか？」

「そんな訳じゃ・・・！」

「なんにしろ一時拘束させてもらう、悪く思うな！」

『ええ〜！！』

見事にハモった。そりゃそうだよね、いきなり拘束するなんて言われたら誰だってびっくりするよ。手に持った槍を構え、じりじりと迫ってくる衛兵さん。逃げる気になれば逃げられるけどそれじゃあ

完璧不審者だ。う～ん、説得できる雰囲気じゃないし、どうしよう・・・・・・。

「はいは～い、衛兵さんそこまでにしといてちょうだい。その人たち、私たちの連れだからさ」

背後からかけられた明らかに場違いな明るい声。全員がそっちの方向を向くとそこには黒いローブを纏った背の低い女性が立っていた。その姿を見るなり衛兵さんは姿勢を正し、女性の方へ向き直る。クロードさんたちの様子を見ると二人ともキョトンとした様子でその女性を見つめていた。え、何？私だけ取り残されてるカンジ？

「こ、これは代行者様、こんなところへ一体何のご用で？」

「ん、だからそこの三人を迎えに来たんだって。真ん中の子がハヤカちゃんでその後ろの二人がクロード君とエステルちゃんだよね？」

「はい、そうですけど・・・・・・」

「あ、誰だかわかんないってカンジだね。う～ん自己紹介は後にして、とりあえずついてきて。ほかのみんなも待ってるから」

「あの代行者様、この者たちは一体？」

「この子たち？この子たちは世界を救う勇者様の一行だよ」

・・・・・・。

気まず～い空気がこの一帯を支配する。あ～あ、言っちゃったよこの人。こうなると思って言わなかったのに・・・・。

「あれ？なんかマズいこと言った、私？」

『言いました』

あら、また見事にハモったね。それはさておき私たちは謎の女性について城の中へ入っていった。

～？～

「いや～自己紹介が遅れたね、私はクレア・ユーシリス。これで

も色持ちの代行者なんだ♪あ、色は漆黒石だよ☆」
前を歩く謎の女性、もといクレアさんはよくしゃべる。城の中に入ってからもずっとしゃべりっぱなしで私だけじゃなくてクロードさんやエステルさんも呆気にとられているようだ。私の印象からするとヴァルナさんといいクレアさんといい代行者の人ってなんかどこかズレてる気がするような・・・・・・？
（あの～エステルさん、代行者の方ってみなさんこんなカンジなんですか？）
（いや、その、クレア様に会ったのは初めてだけどほかの皆様はもっと寡黙というかマジメというか・・・・・・まあ、とにかくこんなカンジじゃないから）
（というかエステル、それはちょっと失礼な気がするんだけど・・・・・・？）
「はいは～いそこまで～、ぜ～んぶ丸聞こえだよ。私、ちょーー地獄耳だから♪」
『ぶっ！！』
後ろで話していた全員が一斉に吹き出す。まさか今の会話が聞かれてたなんて・・・・・・怒られるかな？
「まあ、あながち間違いじゃないんだけどね～。他のみんな、特にユリアとレナードに「もう少し静かにできないのか？」とか「もっと落ち着きを持て」だとかよく言われてるから～。あんまり気にしてないよ、だって私は私だから☆」
『は、はぁ』
それから会議場へ向かう間もクレアさんのおしゃべりが絶え間なく続いた。主に私たちの旅の思い出とか今のハウリの状況とか。何というか親しみやすい人だな、ちょっとおしゃべりが多いけど。
「おーい、例の三人連れてきたよ～」
会議場の扉を開け、中に入る私たち４人。大きな部屋の真ん中にはドーナツ状のテーブル（確か円卓って奴だっけ）があってその周りに４人の男女が座っていた。ん？よく見るとそのうち３人は見覚え

がある。右側からヴァルナさん、一つ飛ばして凜、海さん。とりあえずヴァルナさんは納得できるけどなぜ凜と海さんが??
「ハヤカさん、お久しぶりですわね。お元気でしたか?」
「はい!元気です、ていうかヴァルナさんはなんでここにいるんですか?」
「ちょっとした仕事ですわ。詳しいことはまた後ほど」
ヴァルナさんへ挨拶を済ませ、最大の疑問へ目を向ける。ちなみにクロードさんたちはヴァルナさんと思い出話に花を咲かせていた。
「やっほー疾花、一日ぶり!」
「え〜っと、その、なんで凜と海さんがここにいるの?」
「え?だってここが私の職場だから。ね〜、陸?」
「そうだな、そろそろ正体バラしてもいいころだな」
「はい?」
つまりこういうこと?話の内容と海と呼ばれていた人が陸と呼ばれて・・・・・今まで何か隠してたってワケですか。
「じゃ、改めて自己紹介ね。鈴・紅鸞、ひとまず今は聖魔王の影武者やってま〜す。ちなみに魔人で〜す」
「いままで隠してて悪かったな。俺の名前は太刀花　陸、俺も魔人だ。聖魔王の側近兼護衛をつとめてるんだけど、もっとも今は影武者の、だけどな」
なんかとてつもなくデカい存在の人物と友達になってしまったようだ。

〜?〜

　それから全員が席に座り、まずなぜ鈴が聖魔王の影武者をやっているのかを説明してもらった。どうやら現聖魔王は鈴の双子の妹の彗がやっていたらしいが十年前に失踪、行方不明になってしまったせいで鈴が代わりをやっているらしい。容姿が瓜二つだったため髪型を変えるだけで何とかなったらしい。今でも捜索は続いてるそう

だが見つかる気配は全くないらしい。んで海さん、もとい陸さんは初代聖魔王の時代から代々聖魔王の側近をつとめてきたこの国で最も古い魔人らしい。そして鈴の右隣に座っている人はゼピルム騎士団の総指令官である総長をつとめるレイナー・バレンシュタイン・翠蘭さん。彼もゼピルム屈指の名家の出で実力も非常に高いそうだ。

「さて、自己紹介はこのあたりで終わりにしてそろそろ本題に入るぞ。それではハウリの近況報告から頼む」

「では、私から報告させていただきますわ。最近ハウリ、というか中央大陸全土で魔物の異常発生がみられますの、他にも海底遺跡以外でも自律機動兵器が確認されてますわ。それに南と東の大陸でも同じような現象が起きてるそうです」

「んじゃ次にゼピルム側からの報告だけど、そっちの報告にあった魔物の異常発生とか自律機動兵器とかはないけど、代わりに竜の活動が活発になってきてる。まぁ下位クラスであればウチの騎士団でラクショーなんだけど・・・・・活発に動いてるのが中位クラスや上位クラス、それに亜種なんだ。おかげで俺やレイナーとか上級魔人が出張んなきゃいけなくなっちまってな、人手が足りないんだ。つっても竜王クラスや神竜クラスが黙っててくれてんのが唯一の救いかもな」

次々と交わされていく各国の報告。正直言って私にはほとんどの内容がサッパリだけどいくつかはわかるものもある。たとえば海底遺跡以外での自律機動兵器の確認とか、私たちが最初に神君廟へ行ったときに最深部で見たデカい斧を持った変なヤツ、イリスはあれが自律機動兵器だっていったよね。そういえば悪魔の出現はまだ確認されてないみたい、あんなのがあと71匹もでてこられたらたまったもんじゃない。

「それではハウリは他の国と連携して各地で魔物と自律機動兵器の討伐に当たってください。私たちゼピルムは疾花たちのサポートと竜退治を行います、あと人手が足りないんでできれば・・・・・」

「わかってますわ、ハウリから代行者を数名派遣します」

「じゃあじゃあ私たちは一端ハウリに戻るからさ♪後のことはよろしくね～」
そういってヴァルナさんとクレアさんは部屋を出ていった。

第１０章／終わりのハジマリ

残った私たちは今後のこととこの異常現象の原因について話し合うことに。

「ねえ疾花、このことの原因って何かわかる？」

「う～ん、正確にはわからないけど・・・・・・あのみなさん、世界樹ってあると思いまか？」

「世界樹ってあれだろ、空に浮かぶ伝説の大陸アルビオンにある神の化身のこと・・・だったけ？」

「陸、確証ないなら言わないで」

「うっせ、そんな細かいこと古すぎてもう覚えてないわ！」

なんか鈴と陸さんとの間でケンカが起きそうなカンジなんだけど・・・。ていうか陸さん、見た目２０代だけど実年齢一体いくつだよ？まあこの現象の原因を一番よくわかる人物がすぐ近くにいるんだよね～。というわけでイリスさん、よろしくお願いします！

（まったくテキトーね、構わないけど）

「あの、ちょっといいですか？」

「何、疾花？」

「今の状況説明できる人いるんで説明しちゃいますね。じゃあイリス、お願い」

「はいはい、じゃあちゃちゃっと説明しちゃうからよーく聞いててね」

三人はいきなり私の後ろからでてきたイリスに驚いたようだったがそのことについては追求せずイリスの話に耳を傾けていた。

いやー肝が座ってるね、さすが伊達に長生きしてるワケじゃないみたいだ。とにかく説明をうけて三人とも納得したようだけどどうも浮かない顔をしている。そうだよね、いきなりこんな話されちゃ誰だって暗くなるよ。

「はぁ、まさか旧文明崩壊の時と同じことが起きてるなんて・・・・・・・・」
「思っていたより事態は深刻だったみたいだな、これではどうしようもない」
陸さんとレイナーさんがネガティブなことを口にする。そっか、二人は前の文明が崩壊した頃のこと知ってるんだよね。それじゃあ暗くなっても仕方ないか。
「あのイリスさん、解決する方法はないんですか？」
「それは簡単よ、根本的な問題である世界樹システムをこの世界から切り離せばいいんだから。でも今回のは事態が急すぎる、もしかしたら人為的に操作されてる可能性があるわ」
「じゃあ飛空艇か何かで浮遊大陸に乗り込めば・・・・！」
「残念、それは無理よ。今の技術じゃ浮遊大陸のある成層圏までは飛べないわ」
「そ、そんな・・・・・・・・・」
八方塞がり。これじゃあどうにもならないよ、ならばなんで私なんか呼んだんだろう？
「あのさー、別に浮遊大陸にいけないなんて一言もいってないわよ？」
「え？イリス、どうすればいいの？」
「世界各地にあるゲート、つまり転送魔法陣を使えばいいのよ。今動くのは・・・・・・・・ハウリにあるやつだけみたいね、他のには何かおかしなプロテクトがかかってるみたい」
「なら決まりだね。聖魔王様、私たちはハウリに戻りそのゲートから浮遊大陸へ向かいます」
さすがクロードさん、行動が早い！早いところ片づけて平和にしなくちゃ、もちろん誰も悲しまないように！エステルさんもうなずいてるし、早速出発だ。
「おいおいちょっと待て、まさか三人だけで乗り込む気か？そりゃ無茶だぜ」

そう意気込んだところに陸さんが水を差す。もう！空気読めないひとだなぁ。
「いえ、後からあと二人合流しますの・・・・・・・」
「そういう意味じゃねぇよ。たとえ5人になってもおまえたちだけじゃ弱すぎて話にならないってことだよ」
なっ！今のはさすがにカチンときたな、いくら自分が魔人だからって人に向かって弱すぎるだの話にならないだのとかは失礼すぎるって！なんて言ってやりたかったけどとりあえずぐっと我慢したがエステルさんはそうも行かなかったようだ。
「どういうことですか！これでも私たちは72柱悪魔の1柱を倒したんですよ！」
「ちょ、エ、エステル、やめなってば！」
「うるさい！バカにされてまで黙ってられるか！」
「あ？初耳だな、それ。そんなことまで起きてたんか。まいいや、たった5人で悪魔を倒したのは褒めてやらないでもないけど、君たち5人はその倒した悪魔以上の力を持った連中何百体を相手に五体満足で帰ってこられる自信あるか？そういうことだ」
「そ、それは・・・・・・」
それっきりエステルさんは黙り込んでしまった。そりゃそうだ、あの悪魔一体を相手するのにあれだけ手こずったっていうのにあれ以上の相手を何百体もなんて、とても手に負えるはずがない。
「・・・・・・え～っと、何暗くなってんだ？おまえ等？」
「おまえが悪いのだろ・・・・。あんな脅しじみたことを言うからだ」
「そーだよ！今のはいくら何でもヒドイと思うよ」
「な、なんだよ！？俺は事実を言ったまでだぞ！？」
『それがいけないんだ（よ）！』
「うぐっ！」
う～ん？なんかまた話が見えなくなってきたぞ。一体何なんだ？
「あの、つまりどういうことですか？」

「陸の説明ではわからんだろ、私が説明する。つまりこういうことだ、君たちだけでは心許ないので陸と鈴様が同行することになっている」
な～んだ、そういうことだったのか。それならすごく安心だ、世界最古の魔人と仮とはいえ聖魔王をつとめている人が一緒にきてくれるなんて。ん？いや待てよ、陸さんが強いのは何となくわかるけど・・・・鈴ってほんとに強いの・・・・・・？
「ん？疾花、なんか私に対して失礼なこと考えなかった？」
「滅相もない」
そんな凄みのある笑顔で見つめられては正直に考えたことなんていえないよ。とりあえず強いってことにしておこう。
「また失礼なこと考えたよね？」
今度は無言で顔を逸らす。なんでことごとく思考が読みとれるんだ？魔人だから？まあそれはそれとして。私たちと陸さんと鈴はこれからハウリに向かいゲートとやらから浮遊大陸へ。レイナーさんはゼピルムに残り、ハウリとの連合騎士団とともに竜・魔物・自律機動兵器の討伐に。そう決まり、話し合いを終わりにしようとしたそのとき、会議場の扉が大きく開け放たれた。
「いやーすまねぇ、遅くなった！」
「ごめんなさ～い！」
なんとそこにいたのは別行動をとっていた残りの二人、ユーリさんとエリちゃんだった。ていうか二人ともよく入ってこられたな。
「おかえり、二人とも。用事は終わったみたいだね」
「ていうかあんたたちよく入ってこれたわね」
「ああ、衛兵のおっさんが覚えててくれてよ、そのおかげで入れたんだ」
ああ、そういうことか。以外といい人だな、あの衛兵さん。とりあえずここで話し合ったことを二人に教えると意外な答えが返ってきた。
「ワリィけど俺とエリはこっちに残るわ」

「え！ど、どうしてですか！？」
「俺はこっちのいたころは竜退治で稼いでたんだよ。だからワケわかんない連中相手より竜を相手にした方がやりやすいってワケだ」
「私もいつもユーリにくっついてやってたんで」
「そうか、それならこっちに残った方が賢明だね」
「二人とも、気をつけなさいよ。いくら慣れてるからって・・・・」
「おまえ等こそ、な」
そんなわけでユーリさんたちとはまた別行動になってしまった。でも心配する必要はないだろう、あの二人が強いことはよく知っている。だから信じよう、みんな無事に帰ってこられることを。

〜？〜

会議室でレイナーさんとユーリさん、エリちゃんと別れ、私たち5人は城の地下にある宝物庫へ向かっていた。陸さん曰く、出発の為に装備を整える、そうだ。長い螺旋階段を下り終えるとそこには大きな白い扉があった。その前で鈴が何か呪文のを唱えると扉の前に光る魔法陣が現れた。
「ねぇ、宝物庫ってこの扉の奥にあるんじゃないの？」
「残念、ハズレ。この扉は偽物だよ」
「本当の宝物庫はさらに地下にあるんだ、もし襲撃を受けてここにたどり着かれても代々紅鸞家に伝わる呪文がなきゃ宝物庫にいけないってわけだ。たとえ扉を壊してもそこは何もない空間があるだけだ」
ほへ〜、まさかの偽物ですか。ここを作った初代の聖魔王様って頭よかったんだな。感心しつつ現れた魔法陣へ入る。すると一瞬、視界が真っ白になった後、さっきと同じような装飾が施された広い空間に立っていた。目の前には先に魔法陣に入った鈴と陸さんの姿があった。クロードさんたちも少し遅れてやってくる。それから二人の先導で奥へ進むとそこには綺麗に並べられた宝物（？）の数々。

派手な装飾されたものはなく、どちらかというと地味なものばかりだったがそれらひとつひとつが荘厳な雰囲気を放っていた。
「さて、ここに来た理由ですけど。みなさんに強力な武具をお貸しします！じゃあまずクロードさん、どんな武器がいいですか？」
「え、それでは双剣とかありますか？」
「へぇ～二刀流ですか・・・・カッコイイですね！んじゃ陸、チョイスヨロシク！」
「結局人任せか・・・・構わないけど。・・・・・・・これなんかどうだ？」
そういって陸さんが取り出したのは金と銀で装飾された一対の片刃の剣だった。どことなく刀のような雰囲気をした剣だな。
「神器【双極の魔神剣】。どんな能力かはわからないがとにかく一級品であることに変わりはないぜ」
「う～ん、他のはありませんか？」
「そうか、じゃあその辺にいっぱいあるから自分に合うもの探してみてくれや。次にエステルさん、あんたはどうする？」
「私、基本素手なんで。籠手とかありません？」
「確か防具関係はこっちにあったな。ついてきてくれ」
クロードさんたちは陸さんと自分に合う武器を探しているので私は鈴と一緒に探すことに。そんなに器用じゃないからいつもよく使っている剣がいいと鈴にいうととっておきがあるというので鈴にくっついていく。そしてたどり着いたのは宝物倉の一番奥、そこには一本の白い剣が地面に突き刺さっていた。え？何この伝説的な雰囲気は？これ引き抜いたら王様になるっていう落ち？
「さ、抜いてみて」
「う、うん」
いわれたとおりに柄に手を掛け、力一杯引っ張る。すると何の抵抗もなくすんなりと抜けてしまった。あれ？こんなに簡単に抜けていいものなの？普通もっと力一杯引っ張って抜けないけどがんばってがんばって引っこ抜く（ど根性大根的な？）みたいなドラマがあ

るんじゃ・・・・・・？
「ふふふついに抜いてしまったみたいねそれは絶対に抜けない伝説のけ」
「あの、棒読み丸出しだから。演技下手？」
「ははは、バレたか。まあいいや、それは『崩壊の神翼』。詳細は不明だけど強いんだって」
「そ、そっか。じゃあ戻ろ」
「うん」
　さっきの場所までUターンすると、皆さん武器を選び終わったようでそれぞれの獲物を装備していた。クロードさんは今までの剣の代わりに少し短めの真っ黒な双剣を下げており、エステルさんは銀色の籠手を装備していた。うーん、ビジュアルがいいと何でも似合うな～。
　それから城の最上階にある超長距離転送魔法陣で、ハウリの峰にある神殿へ移動することになった。結構急な話だったけどこっちの準備も万端、あとは乗り込んでおしまいにするだけだ。
「よし、全員はいったな。これからは全部終わるまでもうこっちには戻ってこられない。覚悟決めろよ」
「もちろん！」
「わかってます」
「覚悟なんてとっくに」
「これで終わらせます！」
「よっしゃあ！準備はＯＫ、起動させてくれ！」
　すると足下が輝きだし、視界が徐々に覆われていく。さあ、終わりにしよう！誰一人悲しませずに最善じゃなくて、最高の結果で！！

第１０章／終わりのハジマリ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました！！

まだＰＣは逝ったままなんでネカフェやら何やらにいってこれからもがんばっていきたいので応援お願いします。

あと、お気に入り登録していただいた方々、本当にありがとうございます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8280o/

私と世界が始まった日

2011年10月8日05時39分発行